

末日聖徒イエス・キリスト教会

聖徒の道

1987

9



聖徒の道

1987年 9月号

本書は「エンサイン」「ニューエラ」「フレンド」の記事を抜粋した、末日聖徒イエス・キリスト教会の公式刊行物です。本書は以下の言語で出版されています。月刊——イタリア語、英語、オランダ語、サモア語、スウェーデン語、スペイン語、中国語、韓国語、デンマーク語、ドイツ語、トンガ語、日本語、フィンランド語、フランス語、ポルトガル語、ノルウェー語。隔月刊——インドネシア語、タイ語、タヒチ語。季刊——アイスランド語。

大管長会：エズラ・タフト・ベンソン、ゴードン・B・ヒンクレー、トーマス・S・モンソン
十二使徒定員会：マリオン・G・ロムニー、ハワード・W・ハンター、ボイド・K・バックナー、マービン・J・アシントン、L・トム・ペリー、デビッド・B・ヘイト、ジェームズ・E・ファウスト、ニール・A・マックスウェル、ラッセル・M・ネルソン、ダリン・H・オックス、M・ラッセル・バラード、ジョセフ・B・ワースリン

顧問：ヒュー・W・ピノック、ジョン・H・グローバーク、ジェームズ・M・パラモア、デレク・A・カスパート

編集長：ヒュー・W・ピノック

教会機関誌ディレクター：ロナルド・L・ナイトン

編集主幹：ラリー・A・ヒラー

編集副主幹：デビッド・ミッチェル

編集主幹補佐：ジャン・U・ピンボロー

子供の頁編集：ダイアン・ブリンクマン

レイアウト/デザイン：N・ケイ・ステイブ
ンソン、シャリ・クック

制作：レジナルド・J・クリステンセン

マーケティング・マネージャー：トーマス・L・ピーターソン

聖徒の道 1987年9月号第31巻第9号

発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会

〒106東京都港区南麻布5-10-30

電話 03-440-2351

印刷所 株式会社 精興社

定 価 年間予約/海外予約2,200円(送料共)

半年予約1,100円(送料共)

普通号150円、大会号(1,7月号)350円

International Magazines PBMA8709JA

Printed in Tokyo, Japan.

Copyright © 1987 by the Corporation of the President of the Church of Jesus Christ of Latter-day Saints. All rights reserved.

●定期購読は、「聖徒の道」予約申し込み用紙でお申し込みになるか、または現金書留か郵便振替(口座名/末日聖徒イエス・キリスト教会 振替口座番号/東京0-41512)にて管理本部経理課へご送金いただければ、直接郵送いたします。●「聖徒の道」のお申し込み先……〒106東京都港区南麻布5-10-30/末日聖徒イエス・キリスト教会 管理本部経理課 ☎03-440-2351(代表)●「聖徒の道」の配送についてのお問い合わせ……〒194東京都町田市小川1704-1/末日聖徒イエス・キリスト教会 資料管理部配送センター ☎0427-96-2820

●——も く じ

迷える大軍	トーマス・S・モンソン	2
家庭訪問メッセージ「先を見越した生活」		7
聖き家、主の宮居	リチャード・M・ロムニー	8
デビッド・B・ヘイト長老		
——人を高めて得られる喜び	ロナルド・E・ポールマン	18
私の伝道——時を超えて	ジェリー・L・ジャカード	24
チャーリー	エイリン・D・テルフォード	26
お休み会員に心を向ける	カーロス・E・エイシー	29
聖典を通して夫婦の一致を図る	スペンサー・J・コンディ	32
神殿に魅せられて	シャローン・M・ホーキンス	35
ソレン・エッツバーク		
——人生の行方を決めた福音	ジャン・アンダーウッド・ピンボロー	36
——若人のために——		
奇跡を行なう備え	エズラ・タフト・ベンソン	40
あなたは今、この世で何をしていますか	ジョン・H・グローバーク	42
キリストのことを話す	ビビアン・ハーマー	48

チャーチニュース

各地のたより

子供のページ(別冊付録)

世界のおともだち		2
ぼくのえ、わたしのえ		3
改宗—第2話(聖典からの物語)	シェリー・ジョンソン	4
エライザ・R・スノー	ジェーン・マックブライド・チョート	6
喜びのしゅうかく	パット・グレアム	8

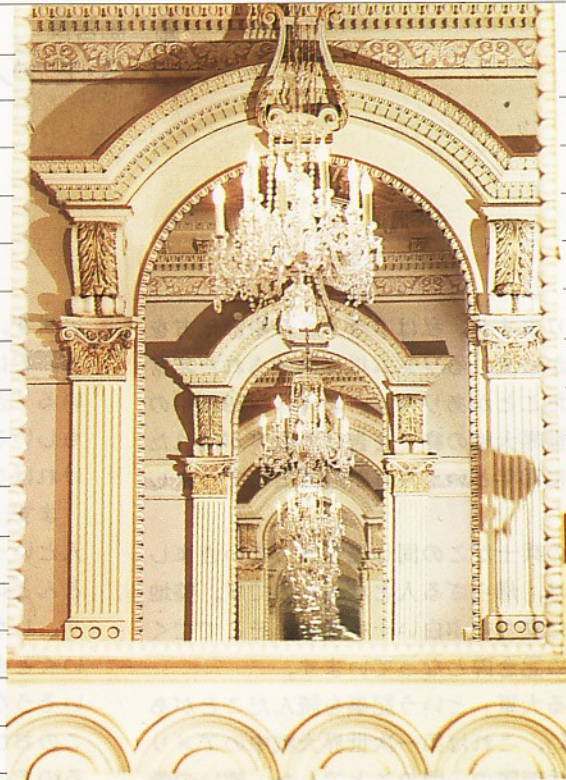
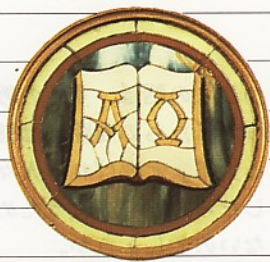
表紙:(表)ニュージーランド神殿

(裏左上)ソルトレイク神殿、(右上)サンパウロ神殿(ブラジル)、

(下)アルバータ神殿(カナダ)。本誌「聖き家、主の宮居」参照

THE UNIVERSITY OF CHICAGO

軍大る文数



迷える大軍

第二副管長

トーマス・S・モンソン

しばらく前になりますが、私はフランスの中部地方を
通ってゆるやかに流れるソム川にかけられた非常に
古い橋の上に立ったことがあります。思えば、1918年の
休戦、そして第一次世界大戦の終了を告げる歌声が流れた
あのときから、すでに70年という月日が過ぎ去ってしま
した。

戦争中、何千人もの兵士がこの同じ橋を渡っていきまし
た。そしてその多くは、帰らざる人となったのです。整地
された戦場跡の墓地に立ち並ぶ白い十字架は、そこで亡く
なった人々の忘れ得ぬ記念碑となっています。

私はかつて「迷える大軍」という記事を読んだことがあ
ります。「迷える大軍」、これは第一次世界大戦中のアメリ
カ合衆国陸軍第77歩兵部隊の一団のことでした。戦いの最
中、この部隊は完全に敵に包囲されてしまったのです。食
糧や水にもこと欠き、負傷兵たちを移動させることさえで
きない状態でした。しかしそのような中であっても、この
部隊は敵軍からの降伏勧告にも応じず、何度も繰り返され
る攻撃をしのいでいました。そして、完全に孤立した絶望
的な状態がしばらく続いたあとに、第77師団の別の部隊が
進軍して来て、この「迷える大軍」を救い出したのです。

従軍記者たちは、その救出部隊は戦友を救い出すために
出かけた愛の十字軍さながらに努力していると書き送った
のでした。兵士たちは進んで危険な攻撃の矢面に立ち、勇
ましく戦って死んでいきました。私の心に、オリーブ山で
述べられたあの不朽の垂訓の断片がふと浮かんできました。
「人がその友のために自分の命を捨てること、これよりも
大きな愛はない。」(ヨハネ15:13)

「迷える大軍」の救出

この「迷える大軍」と、救出のために払われた大変な代
償についての話は、今ではほとんど忘れ去られてしまっ

ています。しかしこの話は、多くの教訓を残してくれていま
す。では今日、私たちの周囲には孤立した状態に置かれて
いる「迷える大軍」と呼ばれる人々はいないでしょうか。
もしいるとしたら、彼らを救うために、私たちは何をしな
なければならないのでしょうか。

まず、障害を持った人々、老人、夫に先立たれた人、病
人といった「迷える大軍」がいます。このような人々のほ
とんどは、「孤独」と呼ばれる荒涼とした荒野の中にいま
す。しかし、若さが失われ、健康を損ない、体力が衰えて
いくとき、またかすかな希望の光さえも消えかかってしま
いそうなときでも、彼らに心をかけてくれる人々がいれば、
このおびただしい数の「迷える大軍」を助けることができ
るのです。

13歳のときにそのような人々に救いの手を差し伸べたあ
る少年のことが思い出されます。彼と彼の友人たちの所属
するワード部には、大勢の貧しい人、年老いた未亡人たち
が集っていました。当時、私はそこの監督をしていました。
少年たちはすばらしいクリスマスパーティーを開くために、
ずっとお金をため、計画を練ってきていました。それまで
の彼らは自分たちのことだけで頭がいっぱいでした。とこ
ろが、彼らのリーダーのフランクがクリスマスの真の精神
に目覚め、それまでためてきたお金を自分たちのパーティ
ーのためではなく、同じワード部の一緒に住んでいる3人
の年老いた未亡人のために使うことを提案したのです。こ
うして彼らは新しい計画を練り始めました。

新しい計画に胸を躍らせながら、少年たちは特大のロー
ストチキンやポテト、野菜、クランベリー、そしてアメリ
カのクリスマスの祝いに必要なものをすべて買いそろえま
した。そしてそのプレゼントを手にも未亡人たちの家に行っ
たのです。ドアをたたいてから、彼らは、その年代の少年
たちの特徴とも言える調子っぱずれの声で歌い出しました。

「聖しこの夜、星は光り……。」そして持って来たプレゼントを手渡したのです。その歌ははるか昔、かの栄光ある夜の天使たちの歌声よりも美しく、彼らが贈ったプレゼントは3人の博士たちの贈り物にも劣らないすばらしいものとなったのです。

愛——傷を癒す薬

思いやりのない言葉によって互いに遠ざけ合っている母親、父親、息子、娘といった「迷える大軍」もいます。ではここでひとりの若者の例を見てみましょう。その若者をジャックと呼ぶことにします。

ジャックはそれまで、父親と幾度となく激しい口論を重ねてきていました。ジャックが17歳になったある日、ふた

りはそれまでになく激しい口論をしました。ジャックは父親に向かって言いました。「家を出ていくよ。二度と戻るもんか。」そう言うと部屋に入って荷物をまとめたのです。母親は思いとどまるよう言いました。しかし腹を立てていた彼は聞く耳を持ちませんでした。こうしてジャックは、泣いている母親を玄関に残し、家を出ました。

庭を通してまさに門を出ようとしたとき、彼の耳に父親の呼ぶ声が聞こえてきました。「ジャック、お前に家を出ていくようにさせた責任の大半は私にある。そのことには心からすまないと思っている。家に戻りたいと思ったら、いつでも戻ってきなさい。これからはもっとまじな父親になるよう努力するからね。ただ、いつもお前を愛しているということだけは忘れないでほしい。」



プレゼントを手に
未亡人たちの家へ
行ったのです。
ドアをたたいてから、
彼らは
歌い出しました。
「聖しこの夜、
星は光り……。」

「あなたがたは、なぜ生きた方を死人の中にたずねているのか。そのかたは、ここにはおられない。よみがえられたのだ。」この感動的な言葉は、人類という「迷える大軍」が救われるようになったことを宣言するものでした。



ださったことを証します。また、主は単なる教師ではなく、真理の教師であられます。また主は一般的な意味での模範にとどまることのない完全な人生の模範であることを証します。主は偉大な医者でもありましたが、単なる医者以上のお方でした。人類という「迷える大軍」を救われた主は文字どおり世の救い主であり、神の御子、平和の君、イスラエルの聖者、よみがえりの主です。主はこのように言われました。「われは始めなり終りなり。われは生ける者なり殺されたる者なり。父と汝らの間の仲保者なり。」（教義と聖約110：4）

私は主の証し人として、主が生きてましますことを証します。また主の教えと福音には、信頼と誠実さをもって主に心を向ける人々に救いをもたらす力があることを心から証申しあげます。□

ホームティーチャーへの提案

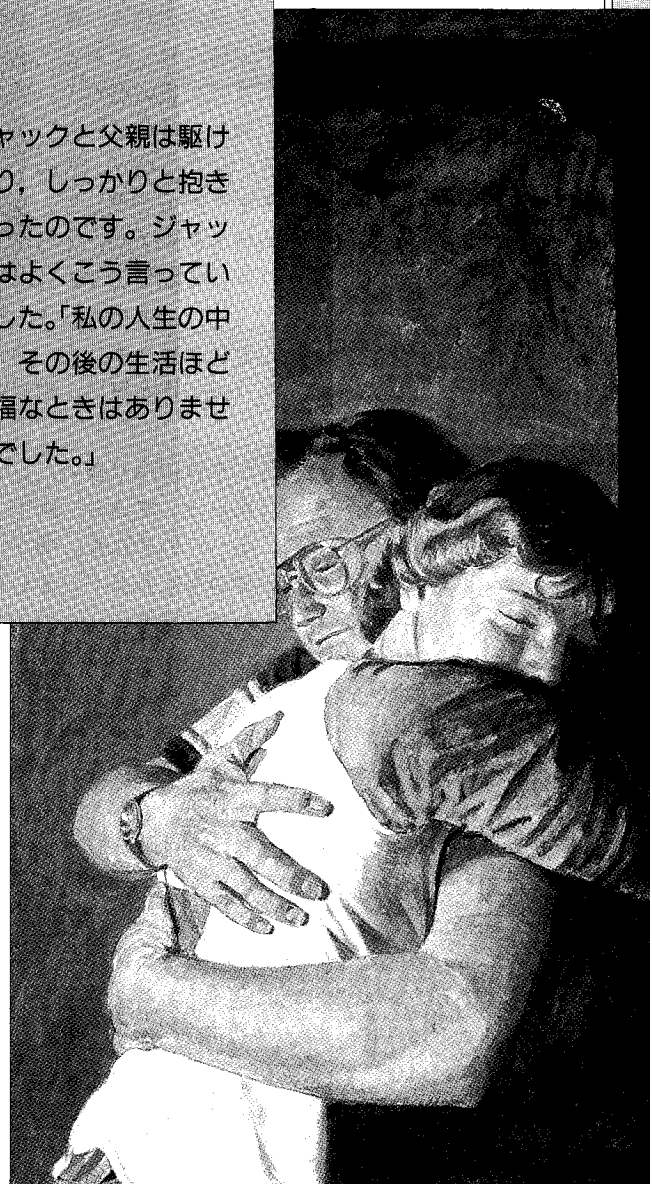
強調点：ホームティーチングのときに、以下の点について話し合うとよいでしょう。

1. 第一次世界大戦中の「迷える大軍」の話は、一度は窮地に陥りながらも無事救出された兵士の話である。
2. 今日でも、私たちが援助できる別の「迷える大軍」がいる。それは、障害を持った人々、年老いた人々、未亡人、病人、お互いに孤立してしまっている家族、罪を負っている人々、無知な人々の大軍である。そのような人々にどんな手助けができるか考えてみたことがあるだろうか。
3. もし主イエス・キリストの贖いがなかったならば、私たちも皆永遠の死に定められた「迷える大軍」となっていたであろう。
4. イエスは文字どおり世の救い主、神の御子、平和の君、イスラエルの聖者、よみがえりの主である。主の福音には、信頼と誠実さをもって主に心を向ける人々を救う力がある。

話し合いを進めるために

1. 私たちの生活の中での救い主の役割について、あなたの感じていることを述べる。

ジャックと父親は駆け寄り、しっかりと抱き合ったのです。ジャックはよくこう言っていました。「私の人生の中で、その後の生活ほど幸福なときはありませんでした。」



2. このメッセージの中に、家庭で読んだり話し合ったりするのによい聖句や言葉はないだろうか。
3. 話し合いをより充実したものとするために、訪問する前に家長と話し合っておくとよい。監督や定員会指導者からのメッセージはないだろうか。



家庭訪問メッセージ

先を見越した生活

目的：先を見越した生活とは、当面の必要に対処するだけでなく、将来への備えも怠らな生活であることを理解する。

みずからをよく管理し、子供たちを立派に育てていくうえで、不確かな将来の中に安らぎを見いだすことほど大きなチャレンジはありません。たとえきょう一日、生活の基本的な必要が満たされたとしても、明日はどうでしょうか。歴代の予言者たちは私たちに、先を見越した生活、言い換えれば、きょう一日だけでなく、明日も自信を持って無事に過ごせるような生活をするようにと勧めています。

先を見越した生活をするための知恵は、古代の人々の話の中にも見受けられます。ヨセフはエジプトの民に、来るべき凶作に備え、豊作の7年間のうちに穀物を蓄えるよう勧めました。また古代ギリシャの作家イソップは、先を見越した生活をするという原則を簡潔に表わした「アリとキリギリス」の寓話を書いています。たくさんの食物に囲まれている間、キリギリスには冬が来たら何が必要かなどということは考えも及ばないことでした。しかしアリは、食べ物が不足するときに備えてせっせと働き続けたのです。その結果、アリは自信を持って将来の生活を見定めることができました。一方キリギリスは（多少なりとも将来のことを考えたのであれば）天の配剤を願うことぐらいいかできなかったのです。

しかし、先を見越した生活というのは、将来のために食物を取っておくだけのものではありません。これには生活のあらゆる分野が含まれてきます。私たちが穏やかな気持ちと自信をもって将来に対処したいと思うのであれば、次の6つの分野、すなわち、読み書きの能力と教育、職業面での能力の向上、財政管理、家庭における生産と貯蔵、健康、情緒面、霊的面の強さといった分野でみずからを備える必要があります。これらの分野でよく備えができるように熱心に努力していれば、不確かな将来に安心して対処していくことができます。

中央扶助協会会長のバーバラ・W・ウインダー姉妹は、先を見越した生活をするについて次のように話しています。「先を見越した生活とは、自分たちに与えられているものを慎重に、かつつましく使うことであり、現在の必要

に対して賢くこたえながら、なお将来に対しても備えをすることです。」

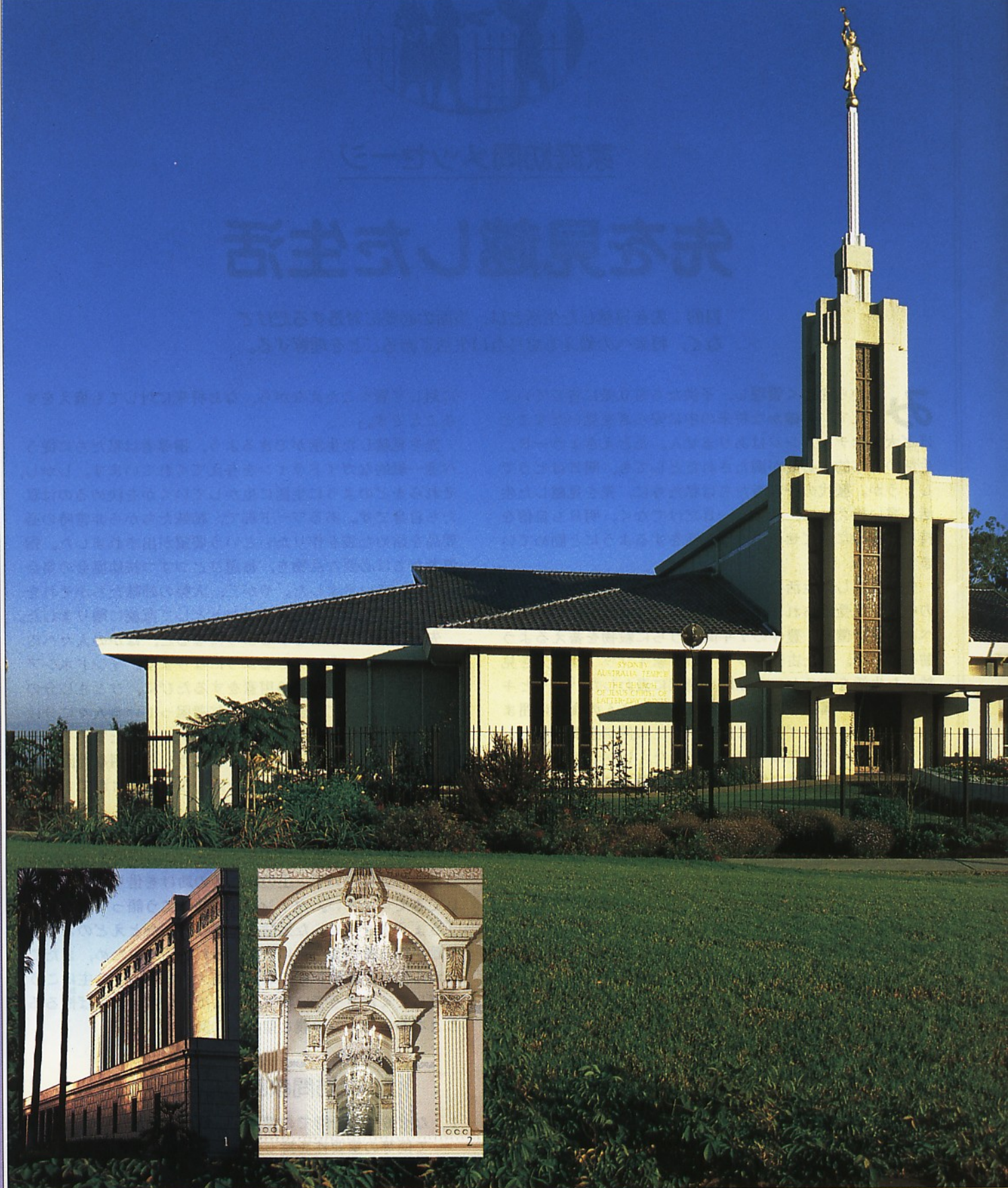
先を見越した生活ができるよう、指導者は私たちに従うべき一般的なガイドラインを与えてくれています。しかし、それらをどのように生活に生かしていくかを決めるのは私たち自身です。あるワード部で、姉妹たちから非常時の必要品を詰めた袋を作りたいという要望が出されました。指導者たちは必要な品物を、毎週ひとつずつ扶助協会の集会で紹介していきました。やがて、大勢の姉妹たちがそれを完成させ、クリスマスプレゼントとして家族に贈りました。

先を見越した生活をするようになると、ほかの人々への援助も、もっと楽にできるようになります。インドネシアのソロ支部では、食事の用意をするたびに、ひとさじ分のお米を別にとっておき、それを毎週困っている人々に分け与えるようにしました。インドネシアの姉妹たちの平均収入は、年間わずか140ドルですが、こうした賢明な計画をすることによってお互いに祝福を分かち合うことができるようになったのです。

あなたはどれだけ備えができていますか。先に述べた6つの分野について考えてみてください。各分野でのあなたの自身の必要について、主のみたまの助けを借りながら計画してみてください。ウインダー姉妹はこう語っています。「きょう先を見越した生活をするなら、たとえどのような困難が待ち受けているにせよ、それは明日のため、またこれから先の生涯のための最良の備えとなります。主はこう約束してくださっています。『もし汝らに備えあらば怖ることなからん。』（教義と聖約38：30）」□

訪問教師への提案

1. なぜ6つの分野での備えが、個人と家族の幸福にとって同等の重要性を持っているのか話し合う。
2. なぜバランスの取れた備えが心に平安をもたらすのか話し合う。なぜ心の平安は霊的な成長の大切な要素となるのだろうか。



1. アリゾナ神殿 2. ソルトレーク神殿の内部 3. シドニー神殿(オーストラリア) 4. ジョーダンリバー神殿(ユタ州)のバプテスマフォント

聖き家、 主の宮居

リチャード・M・ロムニー

聖なる神殿、主の宮居は、霊的な渇きの見られるこの世にあって、人々を生き返らせ、活気づける場所、オアシスにたとえられます。その壁の内側は、すべてが平安に満ちています。人々は、世事を離れてこの神殿に入ります。そこは、美と敬虔^{けいけん}の場、とりわけみたまが語りかける場所です。人々は理解を求め、約束を交わし、神から祝福を受けるためにここにやって来ます。同時に予言者や神権指導者は、ここで靈感を祈り求めます。またここでは、死者のためのバプテスマなど神聖な儀式が執り行なわれ、結婚の絆は永遠のものとされ、家族は永遠に結び固められるのです。

開拓時代の職人の手に成る立派な木の装飾が施されたみかげ石の神殿であろうと、その近代的な白い塔の上の金色に輝く文字がスペイン語、中国語、ドイツ語のいずれであろうと、この神殿という建物ができあがるまでには、実に多くの時間、技術、労力、資金が費やされてきました。

しかしそれらの犠牲にも増して、人々はへりくだった心と悔いる精神とをもって自己を制し、何よりも神の国を求めることに生涯を捧げ、物欲を捨てて永遠の富を求めるという大なる犠牲を払ってきたのです。

これは聖なる宮居、神殿です。主はこの中で予言者たちにみ姿を現わされ、人々と誓約を交わしてこられました。古代イスラエルにおいても、古代アメリカにおいてもそうでした。そして今日も、主は世界中の主の宮居において同じことをしておられるのです。



5. 東京神殿



「汝らの兄弟らの心を喜ばせ、すべてわが民の心を喜ばせよ。彼らは力を尽してわが名のためにこの宮居を建てたればなり。」

見よ、われこの宮居を嘉納せり。わが名は此所にあらん。われは、この宮居にありて愛憐をもてわが民に姿を現わすべし。

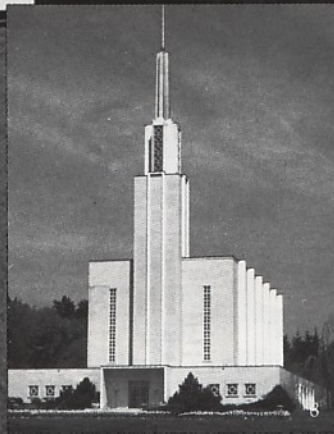
わが民よくわが誠命を守り、この聖き宮居を汚すことなくば、われわが僕らに現われ、われ自らの声をもてこれに語るべし。

誠に幾千幾万の人々の心は、天より注がるる祝福によりて真に喜びを覚え、またわが僕たちがこの宮居に於て授けらるるエンダウメントによりて喜びを覚えん。

而してこの宮居の名声は外国までも拡がらん。これわが民の頭に注がるる祝福の始めなり。」(教義と聖約110:6-10)

「かくてこの宮居、祈りの家、断食の家、信仰の家、栄光の家また神の家、すなわち汝の宮居となり、この宮居に汝の民の入ることをすべて主の御名に於て為(せ。)」(教義と聖約109:16-17、カートランド神殿の献堂式の祈りより)

「家族のつながりが死を越えても続くということは理にかなっている。人は切にそれを望んでいる。天の神は、これを実現させる方法を示してくださった。主の宮居における神聖な儀式がそれである。」(ゴードン・B・ヒンクレー『なぜ神殿を建てるか』「末日聖徒イエス・キリスト教会の神殿」p.6)



6. サンパウロ神殿(ブラジル) 7. マンタイ神殿(ユタ州)の結び固めの部屋 8. スイス神殿 9. セントジョージ神殿(ユタ州)



10

「あなた方はこの世の創造について学び、エデンの園に置かれた私たちの最初の両親について学ぶ。また、サタンがいかにアダムとイヴを誘惑したか、ふたりがいかにエデンの園から追い出され、神のみ前から断たれて、すべてにおいて反対のものが存在するこの世に来たのかを学ぶ。アダムとイヴは、この世に来て人生の苦しみだけでなく、喜びをも学んだのである。」(『神の宮居』『末日聖徒イエス・キリスト教会の神殿』p. 11)

「神殿において、私たちは教会の最も小さな最も基本的な組織である家族の絆をつなぎ合わせる。それは一時的なものではない。この世で見られる唯一永久に続く、終わりのない組織である。なぜなら結び固めの力と神権の権能とによって、『永遠のものとされる』からである。それは墓を越えても存続し、永遠の組織としていつまでも存在し続けるのである。」(セオドア・A・タトル『予言と約束』『末日聖徒イエス・キリスト教会の神殿』p. 54)



9

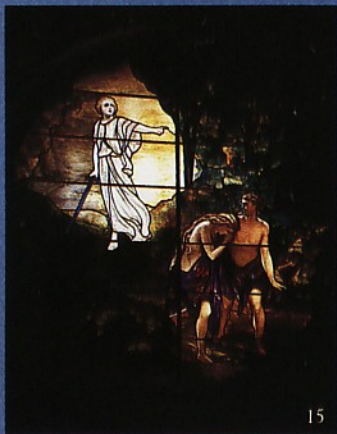
10. マンタイ神殿のステンドグラス: アルファとオメガの文字 11. アピア神殿(サモア)



12.台北神殿(台湾) 13.フライベルク神殿(東ドイツ) 14.ヌクアロハ神殿(トンガ) 15.エデンの園を追われるアダムとイヴを描いたソルトレ



14



15



16



13

ーク神殿のステンドグラス 16.ハワイ神殿

「主の家である神殿に入ることはまことに有益なことである。神殿は神権にまつわる教育の場所、平安の宿る場所、誓約を交わす場所、祝福にあずかる場所、啓示が下される場所である。……賜と祝福に満ちた神殿は、イエス・キリストの福音の要求に従おうとするすべての人々に開かれている。……そこで行なわれる儀式は神聖なものであるが、不思議なものではない。福音を受け入れ福音に生き、自分自身を清く保つ者はみなその儀式を受けることができる。」（ジョン・A・ウィットソー『神殿を仰ぎ見て』「末日聖徒イエス・キリスト教会の神殿」p. 28）

「わが名に由りて建つべき宮居に於てこれを行うにあらずば、汝らの聖なる洗い如何でわれに受け入れられんや。

この故を以て、われモーセに……幕屋を造り、また創世の前より隠されたりしこれらの儀式を顕さんため約束の地に於て一つの宮居を建つべし、と命じたり。

この故に、われ誠に汝らに告ぐ、汝らの^{かん}香油の儀、汝らの聖なる洗い、死者に代る汝らのバプテスマ、汝らの聖会……は、わが聖き名のために建てよとわが民の常に命ぜらるるわが聖なる宮居の儀式によりて^{きだ}制めらるるなり。

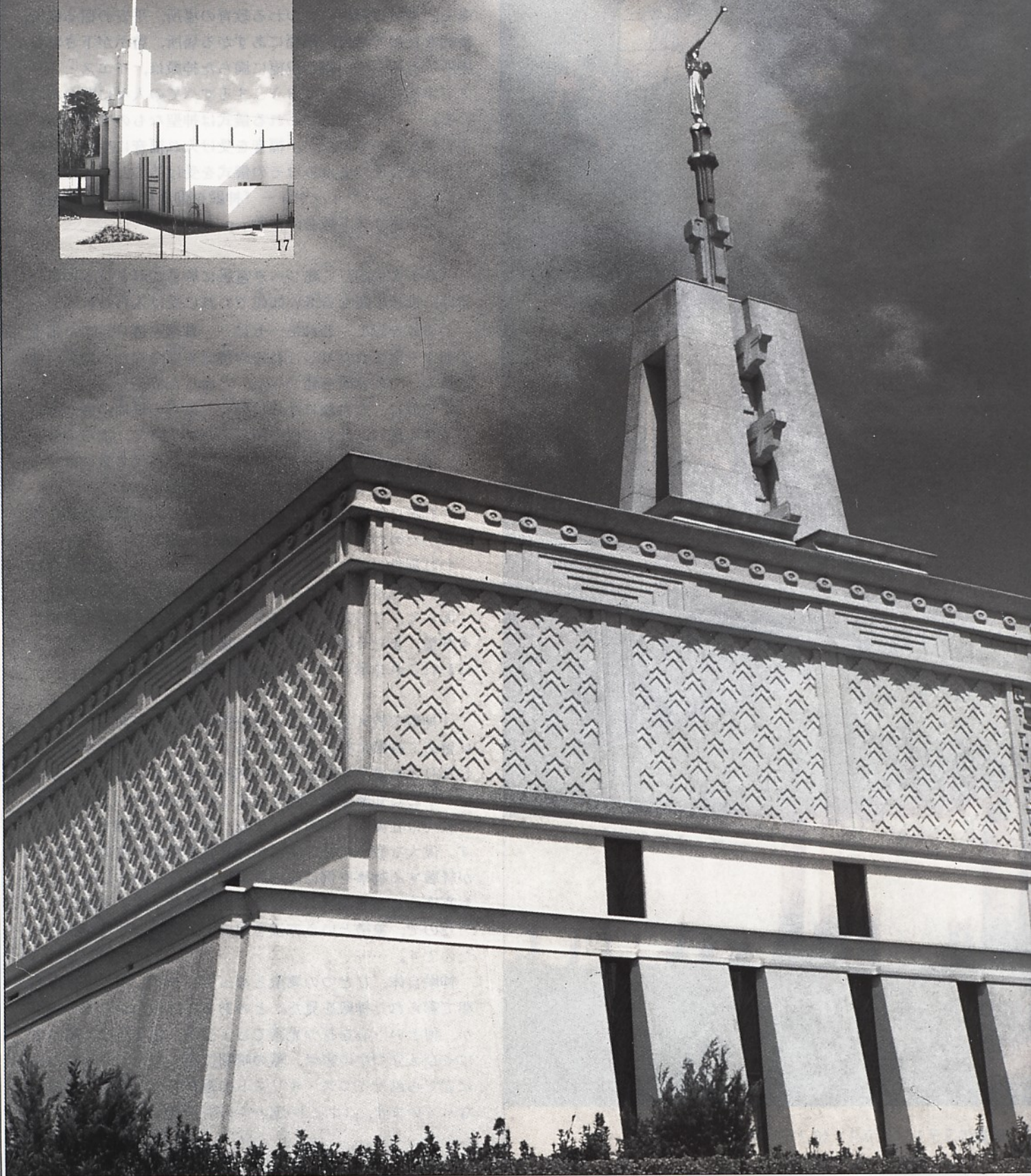
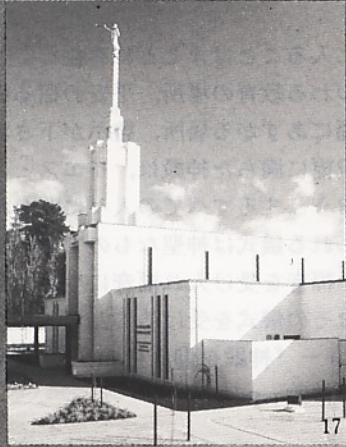
われ誠に汝らに告ぐ、われその中にてわが民に儀式を示さんがためわが名のためにこの宮居を建てよと。

われ創世の前より隠されたること、すなわち時満ちたる神権の時代に関することをわが教会に示さんと図ればなり。

而して、この宮居に関するすべての事、この宮居に関する神権、またその建てらるべき場所などはわが僕ジョセフにわれこれを示すべし。」（教義と聖約124：37-42）

「神殿で教えられることが象徴的なものであることを心に留めて神殿に行くならば、必ずやビジョンは広がり、少しなりとも高められたという気持ちを味わい、霊的な事柄にかかわる知識を増し加えることができるでしょう。神殿の教えは壮麗なものです。また、人の霊を鼓舞するものです。偉大な教師である主は……日常の生活の中で、だれもが経験する物事を例に取られました。……からし種のことも真珠のことも話されました。主は聴き手によく教えたかったので、象徴という方法を用いて、簡単なことを語られたのです。……

神殿自体、ひとつの象徴となっています。夜、全景を照明で彩られた神殿を見たことのある方はおわかりでしょうが、何という心を打つ光景でしょうか。光を浴びて闇の中にそびえ立つ主の家は、霊の暗闇に深く沈んでいくこの世に立てられたイエス・キリストの福音の力と靈感の象徴となっています。」（ボイド・K・パッカー「聖き宮居」pp. 7-8）



17. サンチアゴ神殿(チリ)

18. メキシコシティー神殿

「神殿に入る最良の準備は、主を信じる信仰、完全な悔い改め、バプテスマ、祈り、証など、福音の基本原則を十分に理解することです。こうした準備があれば、神殿の教えは理解しにくいものではありません。……神殿での経験は、イエス・キリストの生涯、使命、贖罪に基づいています。神殿内のすべてのものは、キリストの神性を証し、奉仕、忠誠、献身といった主の愛、模範に従うように教えています。神殿は文字どおり主の宮居であり、主ご自身と聖霊の住まわれる場所です。」(フィルムストリップ「神殿に参入する備え」)

「そうでないとすれば、死者のためにバプテスマを受ける人々は、なぜそれをするのだろうか。もし死者が全くよみがえらないとすれば、なぜ人々が死者のためにバプテスマを受けるのか。……

天に属するからだもあれば、地に属するからだもある。天に属するものの栄光は、地に属するものの栄光と違っている。

日の栄光があり、月の栄光があり、星の栄光がある。また、この星とあの星との間に、栄光の差がある。

死人の復活も、また同様である。」(I コリント15:29, 40-42)

「われらの心より覆い取去られて^{きと}覚^{まなこ}りの眼開かれたり。

われらは、われらに面して教壇の胸欄^{きようらん}に立ちたもう主を見たり。而して、主^{しか}の脚下にはこはくの如き色したる純金の床ありき。

その眼は燃ゆる炎の如く、頭髮白きこと清き雪の如く、その顔は日の輝きにも勝りて光り輝き、その声は洪水の激する音の如し。誠にエホバの御声^{みこゑ}言いたもう。

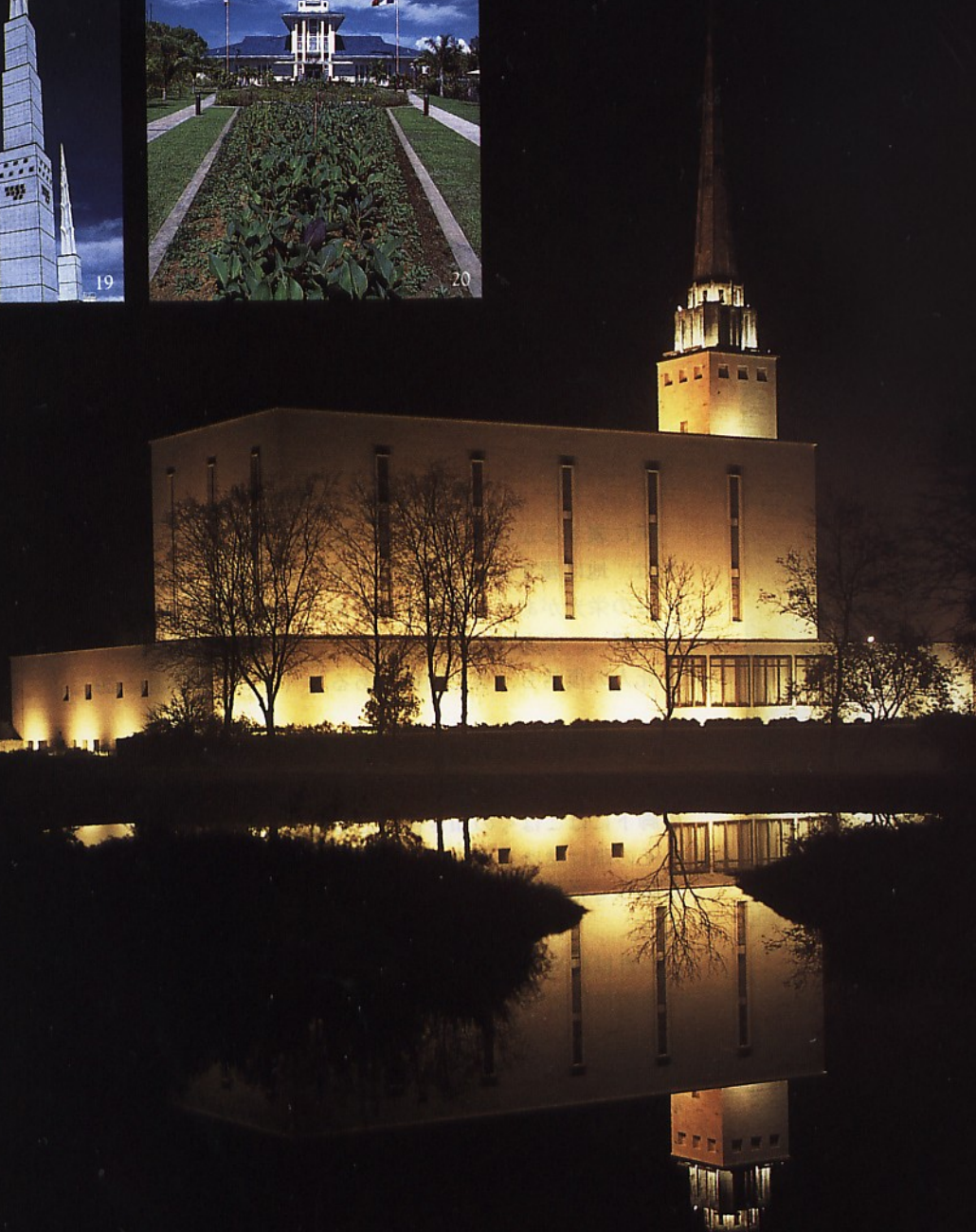
われは始めなり終りなり。われは生ける者なり殺されたる者なり。父と汝らの間の仲保者なり。」(教義と聖約110:1-4)

「私はそのとき祖父(ロレンゾ・スノー大管長)の数歩前を歩いていました。ちょうどそのときおじいさんは私を止めてこう言いました。……『ウッドラフ大管長が亡くなられたとき、主イエス・キリストが私にみ姿を現わされたのは、ちょうどこの場所だったんだよ。……主はちょうどここに立っておられたんだ。床から1メートル位のところだったよ。純金の台座の上に立っておられるようだった。』

祖父は、救い主がどれほど栄光に満ちたお方であるか説明してくれました。また、救い主のみ手、み足、表情、それに美しい白衣などについて細かく説明し、それがみな非常に白さと輝きに満ち満ちていたため、救い主をまともに見るができないほどだったそうです。

それから祖父は……こう言いました。『これがお前のおじいさんの証だ。おじいさんは神殿のこの場所で救い主と実際に会って、救い主と顔と顔を合わせて話をしたんだよ。おじいさんが自分でこう語ったことを決して忘れないでくれ。』(アリー・ヤング・ポンドの日記より)





19. 台北神殿(台湾)
20. パペティ神殿(タヒチ)
21. ロンドン神殿(英国)

「(カートランド神殿の) 外壁のしっくいを用意していた人から、聖徒たちは壊れたガラスや陶器を寄付してくれるよう頼まれていました。それらを砕いてしっくいに混ぜ合わせるためです。神殿の壁が無数の高価な石でできているように見せるために、陶器やガラスの小物などを含めた日の光に輝く材料を集めるための努力がなされました。その結果、陶器やガラス製品をしまっておく戸だながみな空になってしまったほどでした。」(E・セシル・マックギャビン「インブループメント・エラ」1940年10月号, p. 595)

「わたしは一つの事を主に願った、わたしはそれを求める。わたしの生きるかぎり、主の家に住んで、主のうわしきを見、その宮で尋ねきわめることを。」(詩篇27: 4)

「その宮で、すべてのものは呼ばわって言う、『栄光』と。」(詩篇29: 9)

「神よ、われらはあなたの宮のうちであなたのいつくしみを思いました。」(詩篇48: 9)

「終りの日に次のことが起る。主の家の山は、もろもろの山のかしらとして堅く立ち、もろもろの峰よりも高くそびえ、すべて国はこれに流れてき、多くの民は来て言う、『さあ、われわれは主の山に登り、ヤコブの神の家へ行こう。彼はその道をわれわれに教えられる、われわれはその道に歩もう』と。」(イザヤ2: 2-3)

「あなたがたが求める所の主は、たちまちその宮に来る。」(マラキ3: 1。IIIニーファイ24: 1; 教義と聖約36: 8も参照)

「わたしは毎日、宮ですわって教えていた……。」(マタイ26: 55)

「そして、彼らに教えて言われた、『わたしの家は、すべての国民の祈の家となえらるべきである。』」(マルコ11: 17)

「この人(シメオン)が御霊に感じて宮にはいった。」(ルカ2: 27)

「私ニーファイはまたソロモンの神殿にならって一つの神殿を建てたが、そのちがっている所はさほど多く貴重な品を使って建てなかつただけである。それはかように貴重な品が当時この地になかつたから、それでソロモンの神殿とちがわない様に建てる事ができなかったのである。しかし、その建築の様式はソロモンの神殿と同じであって、その製作の技術は非常に見事であった。」(IIニーファイ5: 16)

「選ばれた霊たち〔は〕……、偉大な末日の業の基を置く務めに携わるべく、時の満ちる時代までこの世に来るのをとどめおかれていた。

神殿の建築と死者の贖いのためにそこで儀式を執行することも、偉大な末日の業の一部である。」(死者の贖いに関する示現1: 53-54)

「これら忠実な兄弟たちのために長い間、熱心に主に願って参りました。私たちは、何時間もの間、神殿の一室で主に導きを願い求めました。

その結果、主は私たちの祈りを聞き届けてくださいました。」(『神権に関する啓示と教会役員の支持』「聖徒の道」1979年2月号, p. 23)

「主はシオンの確立を命じられ、この神殿の完成を命じられた。主はここかしこの谷あいでは生者と死者のための救いのみ業を行なうように命じられた。そして全能の神は悪魔によってそれが妨げられないように定められた。」(ウィルフォード・ウッドラフ、教義と聖約「公式の宣言-1」p. 293 [英文])

「主、誠にまたかくの如く言いたもう。汝らわが神殿の仕事およびわがすでに汝らに命じたる仕事は、皆これを継続して中止すべからず。汝らの励精と堅忍と忍耐と、汝らの働きとを倍加せよ。さらば、汝ら決して報いを失わじ、と万軍の主言いたもう。」(教義と聖約127: 4)

「かくして汝らの録するところは皆天に於て録さるべく、何にても汝の地に於て結ぶところは天に於ても結ばれ、何にても汝の地に於て解くところは天に於ても解かるるなり。」(教義と聖約127: 7。マタイ16: 19; 18: 18も参照)□



デビッド・B・ヘイト長老

人を高めて得られる喜び

七十人第一定員会会員
ロナルド・E・ポールマン



1930年代半ば、デビッド・ヘイトはソルトレークシティの大きな雑貨店の若い経営者として多忙な日々を送っていました。そんなある日、彼は事務所で著名な人物の訪問を受けました。ヒーバー・J・グラント大管長がその人です。

大管長はヘイト兄弟に、カリフォルニアでの勤務のために、間もなくソルトレークシティをあとにするという話が本当かどうかを尋ねに来たのでした。若い経営者のヘイト兄弟は、グラント大管長から行くことを思いとどまるように言われるのではないかと懸念しながら、その旨を伝えました。

ところが驚いたことに、グラント大管長から返ってきた言葉はこうでした。「それは大変結構なことです。」そして

大管長は、もっと多くの忠実な若い末日聖徒の男性がユタを離れ、人々の信望を得られる場所へ出て行くべきであると述べたのです。

「大管長は『主があなたを祝福したもうように』と言い、私に握手をすると事務所を出て行かれました。」十二使徒評議員会会員のデビッド・B・ヘイト長老は当時を思い返しています。

主は確かにデビッド・ヘイトを祝福してくださっています。仕事や家庭面で、また教会での責任や多くの人々への影響力という点ですばらしい成功を取めていることからそれがわかります。彼は小売業界でも、名の知れた経営者として通っていました。また第二次世界大戦では、合衆国海軍の一兵士として国家に尽くし、カリフォルニア州では、パロ・アルト市の最も愛され尊敬される市長のひとりとなって地域のために尽くしました。ヘイト長老は1930年9月4日、ルビー・オルソンとソルトレーク神殿で結婚し、その後3人の子供を育てあげています。ヘイト長老は、ステーク部長、伝道部長、地区代表を歴任したあと、1970年4月には十二使徒評議員会補助に、そしてその6年後の1976年1月8日には、ヒュー・B・ブラウン長老の死去に伴い十二使徒評議員会会員に召されています。

死んでいたかもしれない

過去をたどってみると、彼が今日の愛される指導者となるまでの、霊的な成長と人格形成の跡を見ることが出来ます。デビッド・ブルース・ヘイトは、末日聖徒の開拓者の子孫として、1906年9月2日、アイダホ州オークレーに生まれました。町の銀行家であり、監督であり、国会議員であった彼の父親ヘクター・ヘイトは、デビッドがわずか9歳のときに世を去っています。彼は主として母親のクララと兄や姉の手で育てられました。

こうして、アイダホ州オークレーの小さな町で、彼は普

通の少年として成長しました。しかしその間、彼は2度ほど命を落とすような経験をしているのです。1度目は、暴走する馬車から放り出されて電柱にぶつかったとき、2度目は川の深い所にもぐって頭を打ったときです。のちに人人のために働くこととなる父に触れて、息子のロバートはこう語っています。「主が、若いときの父の命を守ってくださったのだと思います。」

これから生涯彼の支えとなっていくはずの進取の気性

(右)少年時代のデビッド。
(右上)大学生のころ。
(右下)1930年にルビー・オルソンと結婚したデビッド・ヘイト。



と行動力は、ルビーへの求婚時代にぞんぶんに発揮されています。初めて彼女にデートを申し込んだ日、ルビーはすでにほかの人と夜8時からのデートの約束をしていました。そこで彼は彼女に6時に会ってくれるよう頼んだのです。魅力的なルビーはほかにも何人かに求婚されていましたが、結局彼女が愛するようになったのはデビッドひとりだけでした。

新たな道を開く

運良くも、ルビーは結婚前に母親から、夫の仕事でどんなところに行くことになってしまったかについて行くようにと忠告を受けており、それを聞き入れていました。その忠告どおり、新婚時代の彼らは住まいを転々とするようになりました。子供たちは当時を思い起こし、父親が仕事に専念する一方で、母親が幼い自分たちの生活に精神的な強さと粘り強さをもたらしてくれたと語っています。「母は本当にすばらしい影響力を持った人でした。」娘のカレンはこう言っていま



す。

若い夫、父親として、デビッド・ヘイトは毎週教会の集會に出席し、求めに応じて召しを遂行し、それらに喜びを見いだしてきていました。ところが第二次世界大戦の最中、教会での召しに関して、彼に人生の重大な分岐点となる瞬間が訪れたのです。

ある肌寒い晩、彼はサンフランシスコ湾内のトレジャー島（人工島で海軍基地）沖の離着陸用ドックの上に妻と3人の小さな子供たちを残し、飛行艇でハワイに向かいました。暗い太平洋を騒音と振動の激しい飛行艇に揺られながら、ヘイト小佐は、人生において最も大切なものは何かを考えめぐね、眠れぬ夜を過ごしました。そして彼は、自分にとって最も価値ある大切なものは、ドックの上に残してきた家族であることに気づいたのです。心の中には、家族と永遠に一緒にいたいという気持ちが募りました。

彼は教会の召しに対する自分の決意が、まだ十分ではないことを感じていました。そこで主に、もし戦争が終わってまだ命が残っていたら、どんな召しをも受け入れること、またその召しを通して求められることは何でもすることを約束したのです。息子のブルースが言うように、ある意味でひとつの道を閉ざし新たに道を開くという、彼の新しい人生観がここに現われているのです。

主に求められる資質

しかし、彼は決してみずから教会の地位を求めたり、召しを当然のことと考えはしませんでした。1951年、十二使徒評議員会のマーク・E・ピーターセン長老がステーク部長会を決めるためにパロ・アルトにやって来たとき、デビッド・ヘイトは副監督の責任を解かれ、高等評議員に召されて間もないころでした。彼は、ステーク部長会の一員として主が求めておられるような資質は自分にはないと感じていました。ところが翌日、彼はステーク部長として支持されたのです。

「パロ・アルトのステーク部長として、主人は本当にすばらしい働きをしました。そして大きな成長をみずから目の当たりにすることができました。」ルビー・ヘイトはこう語っています。彼はステーク部センターと数カ所の礼拝堂の建築の監督をし、さらに土地をいくつか購入しています。その地域の現在の礼拝堂は、ひとつを除いてすべてその当時購入した土地に建てられています。

しかしもっと大切なのは、彼がその地域の人々を深く愛したこと、そして同様に人々から愛を受けたことでしょう。ステーク部長会で副ステーク部長として働いたりチャード・ソンネ兄弟（彼はヘイト長老のあとステーク部長と

なり、のちにオークランド神殿の神殿長を務めている）は、ヘイトステーク部長のことをこう語っています。「彼は人々に賛辞の言葉を欠かさない人でした。また自分から進んで人々と親しくしていく人でした。」ヘイトステーク部長の指導技術は常に一定していました。「彼はよく『私たちがしなければならないのはこれです』という言葉で人々に説明をし、各自がその務めを果たすことを期待しました。」

家族の宝

今日教会において、ヘイト長老は組織における神権指導者の訓練、各神権評議員会、定員会を有効に利用するという点に力を入れ、手腕を発揮していることで知られ、その働きは高く評価されています。

パロ・アルトでの何年間かは、デビッド・ヘイトにとって実に多忙な日々でした。そのかげでは、有能なすばらしい妻の愛に満ちた支えが家族にとって大きな宝となりました。子供たちが口をそろえて言うことは、母親の霊的な強さ、いつも変わらない楽天的な性格、奉仕に対する愛が、その数年間確かに父親の大きな力となってきたということです。

同じような状況に置かれたら、それほどまでに家を空けさせる夫の仕事、責任に対して憤慨する妻もいるかもしれません。「私はただぼんやり家にいたわけではありません。地域の仕事をしたり、裁縫をしたり、読書をしたり、教会の責任を果たしたりといろいろなことに熱中していました。本当に、幸せだったと思います。」ルビーはこう語っています。

小学生のころ、いつもきわめて楽天的な彼女をからかう友達もいたようですが、彼女は笑いながらこう言うのです。「でも物事には必ず良い面があるんですもの。」

ヘイト長老夫妻は共に、進んで人々のために尽くしてきました。ふたりの自宅は、夜泊まる場所がなく困っている人々のためにいつでも解放されていました。「大学から戻ってくると知らない人が寝ていたり、知らない人がテーブルと一緒に食事をしているということがよくありました。」娘のカレンはこう話しています。常連の中に、カリフォルニア州のスタンフォード大学に行っている末日聖徒の学生たちがいて、彼らはよく教会の教義に関してむずかしい哲学的な話をすることがありました。カレンは、父親が彼らに何度もこう言っていたのを覚えています。「福音はわかりやすいものだよ。そんなにむずかしくしてはいけない。」

驚くべき発表

子供たちの成長期には多忙な日々を送った父親でしたが、子供たちの方には、なおざりにされたという気持ちは少しも残っていません。彼は自分の方から子供たちに接してい

き、いろいろな面で手助けをしています。「父は私にいつも、父にとって私は大切なお姫様なんだという気持ちを持たせてくれました。」カレンはこう話しています。

「ぼくたちが子供のころ、父は高い山が好きで、よくハイキングやキャンプに出かけて行きました。」こう語るのは息子のブルースです。彼らは日常生活のわずらいから離れるために、休暇を利用して家族で出かけることがよくありました。それも、文明の気配さえ感じられない、人里離れた遠い所まで出かけて行くのです。「一度、かなり奥深い荒野まで入り込んだことがあって、私たちが出会ったただひとりの人でさえ、道に迷っていたということがありました。」ロバートはこうつけ加えています。ブルースの話によれば、このような遠出から、彼はいつも心身ともにリフレ

(右)合衆国海軍の士官を務めたデビッド・ヘイト。

(右上)地域の教会指導者として、地元の教会の発展に大きく貢献した。右側はデビッド・O・

マッケイ大管長。(右中央)孫やひ孫に囲ま

れたヘイト夫妻。(右下)ヘイト長老は、レクリエーションとしてキャンプや釣りを楽しむ。



ッシュして戻ってきたということです。

パロ・アルトの市長として、彼は今日パロ・アルト市民に貢献する数多くの都市開発計画を生み出しています。さらに人柄の良さと温かい心が手伝って、彼は何人かの友人たちを教会に導いています。彼らは、ヘイト長老の取り入れている標準を知り、尊敬するようになっていったのです。教会員ではない知人たちの中には、1963年のあの晩になって初めて、ヘイト市長の教会に対する熱意の深さを知った人もいます。

市議会の会合が終わったところで、ヘイト長老は市の職員、市民、報道関係者に対し、議事予定にないもうひとつの発表事項があることを告げました。「お知らせいたします。私と妻のもとに、モルモン教会の方からスコットランドに行くようにとの指示がありましたので、今晚をもって、

私はパロ・アルト市長および市議会議員を辞任いたします。これをもって議会を解散いたします。」

教会員でない議員たちから、辞任を思いとどまるようにとの説得が続きました。しかし彼は、この召しが自分が予言者と見なすデビッド・O・マッケイ大管長から来ている



ものであることを説明したのです。デビッド・ヘイトにとって気がかりなのはただひとつ、スコットランドにたつ日がいつになるのかということだけでした。

手をすきにかける

「救い主は、手をすきにかけたら後ろを見ないようにと言われましたが(ルカ9:62参照)、私の頭の中にはそれが何度も浮かんできました。」ヘイト長老は今こう語っています。「これまで熱中してきたことを未練がましく振り返るのはやめるべきです。」

24年前のその日、彼はすきに手をかけたのです。そしてそれからは悔やんだり、後ろを見ることは決してしませんでした。教会でより高い責任に召されるたびに、奉仕の機会も増えていきました。しかし、責任が多くなったために、家族への奉仕の機会が減ったわけではありません。むしろ、子供たちの成長とともにその機会は多くなっていきました。

家族との接触を保つために彼が取り入れた方法に、3分間電話というものがあります。義理の息子にあたるジョ

ン・ハンツマンがワシントン D. C. で伝道部長をしていたころ、カレンはよく父親から電話を受け取ったものです。電話の向こうではいつもこう言うのです。「ワシントンでも相変わらず福音は真実かね。」そして何事もないとわかって安心すると電話を切るのです。また、話の内容がむずかしい問題に変わってくると、「ああ、そんなことはすぐ解決するさ」と楽天的な意見を述べて、安心させてくれるのです。彼にとって大切なことは、子供たちが証を持って元気にやっているかどうかという点なのです。

ヘイト家の孫娘のところには、祖父である彼からこんなふうに電話がかかってくるのです。「電話帳を見ていたら、ちょうどこの家の番号に目が留まったんでね……。」

人との接し方

彼は召しを果たしながらも、宣教師の送別会や結婚式、バプテスマなど特別な行事にも参加するよう心がけています。

一人一人のために時間を取るということは、ヘイト長老にとって非常に大切な問題になっています。孫であるロバートの息子のひとりに彼はこう助言しています。「主は君が監督かステーキ部長か、それとも使徒かということにあまり関心を持たれないと思うんだ。それよりも主が関心を持っておられるのは、人々との君の接し方じゃないだろうか。」

もちろん救い主の特別な証し人としての彼の責任には、それなりに大きなチャレンジが伴っています。「主のみ旨とみこころを知るために、通路が常に開いているかどうかを見守ることが自分の責任であると感じています。」ヘイト長老はこう語っています。それには、「主の意と……主の精神」(教義と聖約68:4)を知るために謙遜に祈り求めることが必要になってきます。

「十二使徒定員会の一人一人は皆謙遜に、自分を取るに足りない最も小さな者と感じておられるのではないかと思います。しかし、私は自分が実際そのとおりの者であることを知っています。」ヘイト長老はこう語っています。

「私が最も心がけていることは、力の限り完全に召しを果たすということです。これまでも、私は自分に具わった能力をはるかに超えた力を頂いてきました。」□

*ロナルド・E・ポールマン長老は、これまでにパロ・アルトワード部監督会の副監督、ステーキ部高等評議員を務め、ヘイト長老がパロ・アルトステーキ部のステーキ部長在任中には、スタンフォードワード部の監督の責任にあった。

私の伝道—— 時を超えて

ジェリー・L・ジャカード

祝 祝福師の手が私の頭上から離れたとき、受けた祝福の大半がそんなにも早く、しかもあのような思いがけない方法で成就するとは、彼にも私にも想像がつきませんでした。2年前改宗した私の心を打ったその教義(亡くなった親族を探求する責任)が特に3度も祝福の中で言われていたのです。しかし、家族の中でただひとり教会員となった私にとって、系図をまとめる仕事は、ひどく大変なことのよう思えました。

祝福師の祝福を受けて数年後、私はフランスとベルギーへ伝道に出ました。私は、伝道地でぜひ系図も調べたいと思っていました。父は私に間違って、Jaccard(ジャカード)というのは、Jacquard(ジャクアード)という普通のフランス系の姓のつづりだともらしたことがあったので、フランスに滞在中、私は自分の先祖の資料を集められるのではないかと期待していたのです。

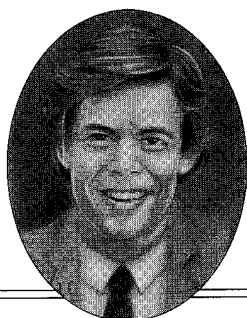
伝道も終わりに近づいたころ、私は伝道部長から、ベルギーのブリュッセルにいる会員たちの系図探求と神殿の仕事を手伝うようにという指示を受けました。そんな折、ある宣教師から「系図についてどれだけ知っているか」という小冊子をもらいました。

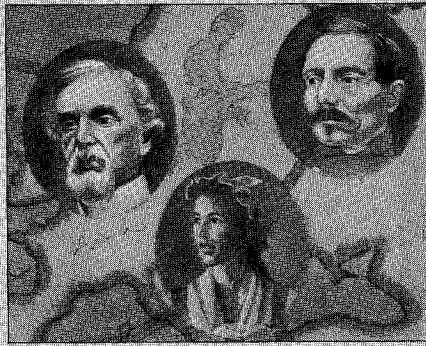
私はその本を最初にひと通り読み終えてから筆者名のリストを見ました。何人かの名前の中に、ひときわ目立ってジョセフ・T・ジャカート(Jacquart)博士という名前がありました。自分の名前と発音が同じと思われる、スペルの違うもうひとりのジャカートに出会ったのです。そのジャカート博士の住所は、ブリュッセルの系図・人口統計学ベルギーセンターとなっていました。

私はすぐセンターに電話を入れ、ジャカート博士に会う約束を取りました。約束の日、センターに出向いた私たちは、ジャカート博士が病気であると知らされたのです。代わりにセンターの所長が私たちのために親切にセンター内を案内してくれました。私たちは所長に、教会について何か聞いたことはないか、もっと詳しく知りたいとは思わないか尋ねました。

意外にも「ぜひ知りたい」という返事が返ってきました。そして彼はこう言ったのです。「我々の協会の次回の月例集会で、モルモンの系図について話していただけませんか。それまでにこちらでもジャカート博士に会って、あなたの系図資料をお渡ししておきましょう。」

約束の日、同僚と私が出かけて行くと、講堂には大勢の





幕のかなたの先祖たちが、
私の宣教師としての
仕事に対してだけでなく、
系図を探求するという
もうひとつの仕事に対して
積極的な関心を
示してくれていたことが
わかります。

人が詰めかけていました。私たちが視覚教材や資料の準備をしていると、白髪の紳士があいさつをしにやって来ました。ジャカート博士でした。博士は私に、フランスとベルギー、スイスの系図地図を渡し、ジャクアード(Jacquard)はフランス人で、ジャカート(Jacquart)はベルギー人、そしてジャカード(Jaccard)はスイス人であると説明してくれました。そして、以前スイス人のジャカードに関する論文を書いたことがあり、私の親戚と思われるスイス人の住所録をいくつか手元に持っているということです。

数週間後、宣教師を解任された私は、住所録を手し、スイスのベルンに住むロバート・ジャカード博士の家を訪ねました。彼は私と親戚関係にあることをすぐに証明して、私の手元にあるものと同じ系図表を書いてくれました。そして、ジャカードという名前の発祥地であるサン・クロワというスイスの村から国境を少し越えた、フランスのベサンコンにある公的史料保管所を訪ね、そこで調べてみるよう勧めてくれました。

ベサンコンで、私は系図上でのアメリカとスイスのつながりを見つけることができました。ロバート・ジャカード博士に調べた結果を通知して1カ月後、彼は紀元1350年までさかのぼるジャカード家の先祖の名前をすべて記した手紙を私に送ってくれました。名前の発祥地はどれもサン・クロワになっていました。それ以来、私はこれらの先祖の完全な系図を探求し続けてきました。また多くの先祖のために、神殿の儀式もしてきました。

この経験を振り返ってみると、幕のかなたの先祖たちが、私の宣教師としての仕事に対してだけでなく、系図を探求するというもうひとつの仕事に対して積極的な関心を示してくれていたことがわかります。この「系図を調べる仕事」は、私のヨーロッパでの伝道期間、2年半をはるかに上回る長期にわたる仕事となっています。□

＊ジェリー・L・ジャカード：ハートフォード・コネチカットステークス部ハートフォード第一ワード部監督



チャーリー

エイリン・D・テルフォード

まだ68歳だというのに、ずいぶん老けて見える人でした。弱々しい体は、病院の窮屈そうなベッドに横たえられて、皮ひもでくくられています。すでに呼吸は浅く、血圧や脈拍は下がり始めています。この人は、チャーリーといい、精神病院の内科・外科病棟に入院する20人の患者のひとりです。私はここで看護婦として働いていました。

その晩、医師は勤務中の私に、チャーリーの死が近いことを告げました。しかし、その死が数時間後にやって来るのか、数日かかるのか、断言するのは医学的にも不可能でした。夜勤の看護婦として、私は家族を呼びべきかどうか判断を任されたのです。

一般の病院の通常の場合であれば、躊躇^{ちゅうちよ}せず、すぐに家族を呼び寄せていたでしょう。しかしここでは、状況が違っていました。患者のほとんどが長期の入院生活を送っており、家族も当人のいない生活に慣れ、中には介抱をあきらめた家族さえいました。患者の死期を確定できないまま、真夜中に家族を呼び寄せるのは、病院の方針に反することでした。

どうすべきか判断に迷いながら、私はチャーリーの枕元に立って、彼の別の姿を思い描いてみました。もはや年をとることも病に伏すこともなく、記憶などを含む精神的な機能障害に悩まされることのない彼。幸せそうな奥さんと笑い声の絶えない子供たちに囲まれた若い夫の彼。そんな姿を思い浮かべているうちに、私の胸は彼と彼の奥さんに対する同情の気持ちでいっぱいになりました。ふたりは今でも愛し合っているに違いないのです。死を前にして、ふたりは少しでも一緒にいたいに違いありません。しかし、その死亡の時期がわからないために、私がふたりの間の妨げになっているのです。

私は頭を下げ、チャーリーの奥さんに連絡すべきかどうかを知らせてほしいと声に出して祈りました。すると心の中に、次のような力強い言葉が返ってきたのです。「チャー

リーの奥さんに今すぐ連絡しなさい。彼は夜明け前に息を引き取るでしょう」と。チャーリーに残された時間は6時間もないことを私は悟りました。また彼の奥さんがここに来るのに1時間がかかることがわかっていました。

そこで、すぐに家に電話を入れ、チャーリーの病状が悪化していることを伝え、病院の方に来るように勧めました。ところが驚いたことに、奥さんはあまり気が進まないといった様子でこう言ったのです。

「明日クラスに出なければならぬし、よく寝ておかないといけななんです。」

「でも、ご主人の状況が良くないんです。こちらにいらっしゃった方がいいと思います。」私はやや強気に言いました。

「行ったところでどうなるんですか。」痛々しい声が返ってきました。「もう何カ月も私のことがわからないんですよ。そんな中で彼に会うのはつらいんです。」重苦しくため息をついてから彼女が言いました。「わかりました。行きます。朝方、7時から8時までの間にはそちらに着くようにします。」

しかしそれでは遅すぎるのです。私は半ば取り乱して、なんとかかわかってもらおうと努めました。「もっと早くいらっしゃった方がいいと思います。できればすぐに。」

「どうして？」彼女が尋ねました。

私は祈りの答えを聞いたことを話したかったのですが、それもできず、ゆっくりとこう言いました。「ご主人の死が迫っているんです。すぐにいらっしゃった方がよろしいと思います……。」そして間を置いてから言いました。「でも、どうするかは奥さんがお決めになってください。」

「じゃ、朝一番に行きます。」そう言うと彼女は受話器を置きました。

彼女の返事に、私はいささか失望しました。しかしまた、最後の決断は彼女に任されていることも承知していました。私はほかの患者を見回りながら、そのことは考えないよう

にしながらも、なお彼女の気持ちが変わってくれればとひそかに祈っていました。それから15分ほどたったころ、彼女から電話がかかってきました。

「主人は本当に死にかけているのでしょうか。」

「ええ、そうです。」私は答えました。

「明け方までもたないんですか。」

私は少し間を置いてから答えました。「医学的には断言できませんが、私の感じでは、明け方前に亡くなられると思います。」

「じゃ、すぐ行きます。1時間ぐらいで着くと思いますから。」

彼女の決断を喜んだものの、考えていくうちに私は不安になってきました。死の床にある夫が妻を認識することもできず、そばにいてあげようとしている彼女の努力を認めてあげることもできないとは、何と悲しいことでしょうか。

そんな思いで仕事を続けていた私は、午前1時ごろになって、再び祈りの必要性を強く感じました。私は、ひとりになれるシーツ置き場に行き、チャーリーが、せめて奥さんを認識できるように、そしてこの最後のときに、言葉は交わせなくても、お互いの気持ちの中にやさしさと愛があふれるようにと天父に助けを祈りました。

彼女が病院に着いたのは、午前3時ごろでした。奥さんのあまりの若々しさに私は少々驚かされました。灰色の髪はきちんと整えられ、小柄でほっそりとした女性でした。とうに80を越えているように見えるチャーリーに比べ、彼女の方は小意気な50代といった感じでした。彼女は、一緒に来ていた若くて美しい娘さんを私に紹介してくれました。

彼女らと一緒にチャーリーの病室に向かい、チャーリーの枕元に近づいたとき、私は一瞬光が彼の空虚な青い目を突き抜けていくような気がしました。彼の固く握りしめられた手はほぐれ、何か話したそうでした。奥さんは、そばのいすに座って、腕をやさしくさすってあげていました。するとチャーリーが笑顔を見せたのです。

「私のことがわかったんだわ。」そう言うと彼女の目には涙があふれてきました。チャーリーの目にも、そして私の目にも涙があふれました。

「そうね、わかったようね。」そう言うと、私は静かに部屋を出ました。

規則的にチャーリーの脈を計りに行く私には、状態がゆっくりと悪化しているのがわかりました。しかしチャーリー

ーは、普段の突飛な動きは見せず、終始穏やかでした。そしてやさしく触れる奥さんの手といたわりの言葉にこたえようとしていました。チャーリーの方は口はきけませんでした。ふたりの心は通じ合っていました。そしてそこに愛があふれていました。

朝の5時になっても、チャーリーはまだ命がありました。日の出まで、45分足らずになっていました。私の方は、チャーリーが死ぬかどうかということではなく、どのように死を迎えるかということが心配になり始めていました。チャーリーも奥さんも、共にあのようなすばらしいひとときを過ごせたのです。私は、死にぎわの苦痛によってその思い出がかき消されてほしくないと思いました。

そこで再び急いでシーツ置き場に駆け込むと、私は彼が静かな臨終を迎えられるようにと、その晩3度目の祈りを捧げました。ひざまずいていると、私は穏やかな気持ちになり、何も心配はいらないという確信を得たのです。

ほかの患者を見回っていると、チャーリーの付き添い人が私を見つけて入ってきました。

「チャーリーなんですが、生きていますのかどうか、わからなくなっただんです。」彼が言いました。私はチャーリーの心臓の鼓動を聞くために、途中ナースステーションによって聴診器を取りました。

チャーリーはベッドにじっと横たわっていました。目は閉じられ、安らかな顔をしていました。

「私が話しかけたら、目を閉じたんです。眠っているのでしょうか。」奥さんが言いました。

私は何も聞こえてこないことを半ば承知のうえで、胸に聴診器をあてました。それから彼らの方を向いて言いました。「ご主人は息を引き取られました。」

ふたりは静かに泣いていました。私はしばらくしてから彼らをドアの方に送り、ふたりに腕を回して言葉にならない気持ちを伝えました。

チャーリーの奥さんは、私の手を握りしめると小声でこう言いました。「電話をくださってありがとう。チャーリーと一緒に過ごせたこの数時間は、私にとって何にも代えがたいものになりました。」□

*エイリン・テelford：5人の子供の母であり、ワシントン州エベレットワード部で扶助協会の家庭管理教師をしている。

お休み会員に心を向ける

七十人第一定員会会員
カーロス・E・エイシー

離れていった理由は何であれ、彼らの値は限りなく大いなるものであり、キリストの体の大切な一部なのです。

コリント人へあてた最初の書簡の中で、パウロはキリストの体すなわち教会を、「人間の体にたとえています。彼は、人間の体と同じように、教会においてはどの会員も大切な存在であると説いています。「目は手にむかって、『おまえはいらない』とは言えず……。」「(I コリント12:21) どの会員も貢献できるものを持っているはずです。

パウロは特に、「他よりも弱く見える肢体」「他よりも見劣りがすると思える肢体」「麗しくない肢体」を会員にたとえ、それらを軽んじてはならないと教えています。会員たちはだれでも皆、お互いに同じ思いやりを示し合うべきです。

次の聖句ほど、強く胸を刺すものではありません。「わたしは右の方に目を注いで見回したが、わたしに心をとめる者はひとりもありません。わたしには避け所がなく、わたしをかえりみる人はありません。」(詩篇142:4) 教会の中に、心を留められていない、顧みられていないと感じてい

る会員はいないでしょうか。私たちは、一見聖徒らしからぬ生き方をしている人に対して、背を向けているようなことはないでしょうか。私たちはそのような人々を捜し出し、愛を示し、教会に戻るよう助けてあげなければなりません。

どのような人々を捜し出すか

どんな人々を連れ戻したらよいのかについて考えるうえで、非常に役に立つのが、迷える羊、無くした銀貨、放蕩息子(ルカ15章参照)のたとえ話です。

迷える羊は、道からそれてしまった人々を象徴していると考えることができます。このような人々は、故意にそうしたわけではなく、群衆につられ、自分たちにより大きな関心を示してくれた人々の仲間に入ってってしまっただけのことなのです。そのような人々は普通、私たちが示す真心からの愛や関心、フェロシップに素直にこたえてくれるものです。

救い主は、ひとりの貴い人間が一枚の銀貨のように教師や指導者の怠慢によって見失われていくことを示すために、



失われた銀貨のたとえ話をういられたのではないのでしょうか。もし自分の責任下にある人々を無視したり、つまづかせたりしている教師や指導者がいるとしたら、彼らは全力を尽くして迷える人々を連れ戻さなければなりません。

また放蕩息子^{放蕩息子}は、神様や家族に対して公然と反発している人々のたとえではないのでしょうか。放蕩息子^{放蕩息子}というのは、しばしば年長者より自分の方が物知りだと思ひ込み、自分のやり方を試したがるのです。そのような人は若さに任せて危険な道を歩んでいるうちに、つまづくこともあるでしょう。また周囲の人々には、なぜ反抗的なのか理由が理解できないかもしれません。しかしどんな放蕩息子^{放蕩息子}であっても、非常に大切な存在であり、決して見捨てられてはならないのです。祈りと熱心な働きかけと絶えざる愛こそが、彼らを連れ戻せるのです。

私たちは、教会との接触を断っている人々をよく理解し、捜し出さなければなりません。離れていった理由は何であれ、彼らも無限の価値を持つ存在であり、キリストの体の大切な一部なのです。

お休み会員たちの気持ち

いわゆるお休み会員^{お休み会員}たちが宗教に対して、また私たちに對してどんな気持ちを持っているのかを理解するならば、私たちは、彼らが福音のすばらしい祝福を見いだすことができるよう、より効果的な援助をすることができます。では、彼らが自分自身に対して、また活発に教会に集っている人々に対してどんな気持ちを抱いているのか、少し述べてみましょう。

——教会に集っていない人々の約半数が、なお自分には

信仰心があると考えています。すなわち、教会との接触はなくなってもなお神を信じ、祈りを捧^{こた}げているのです。

——お休み会員^{お休み会員}と言われる人々は、しばしば自分は神の目から見てふさわしくないと感じているものです。しかしなお、彼らは一般の人々と同じように自分を善人であると思っています。

——彼らは、教会の集会に出席していても、必ずしもそれで人間的に成長できるとは考えていません。

——彼らは、教会に集っている人々はほとんどが、自分たちよりも立派な人間の振りをしている偽善者^{偽善者}だと考えています。彼らは、そのような見せかけをしない自分たちの方が、教会に行っている人々よりもずっと正直であると思っています。

お休み会員^{お休み会員}と言われる人々は、教会は完全な人々が集うクラブではなく、完全になろうと努力している人々のためのクリニックであるということをよく理解する必要があります。私たちに求められているのは、彼らが福音の実際的な面での必要に気づくよう助けることであり、抽象的な原則について説教することではありません。

生活を変える用意

お休み会員^{お休み会員}たちがみずから求めて生活を変えていくのは、多くの場合、何か重大なことや困難なことが起きた場合です。新しいところに引っ越してきたり、愛する人が亡くなったり、赤ちゃんが生まれたりといったときには、福音に添った生活の中に解決法を見いだせるように援助をしてくれる人々に対してより心を開き、良い関係が築かれるものです。



私たちは、お休み会員とのつながりを常に強めていかなければなりません。永続的な友情を通して、私たちは福音に対する理解の種をまき、霊的な経験を分かち合うことができます。このようにして、彼らは徐々に天父との関係を深め、教会の活動に活発に参加していくようになるのです。

より大きな関心を示す

「他よりも弱く見え、他よりも見劣りがすると思える」兄弟姉妹でも、皆貴い存在です。教会は彼らをも必要としているのです。私たちはアルマのように祈るべきです。「主よ……この同胞を再び神の道に入らせることができるよう能力と智恵とを私たちに与えたまえ。」
(アルマ31：35)

私たちの救いはほかの人の救いにかかっています。私たちは、己の信仰にあまり心をかけていない人々に対して、より大きな関心を示さなければなりません。

私の祖父のイーガンが、専任宣教師として伝道に出たすぐあと、祖母は日記にこう記しています。「今晚、ステーキ部長からオフィスに呼ばれ、教会に無頓着なステーキ部内の会員たちのために働くよう依頼を受けた。」

神は、私たちが一致して「うせたものを尋ね、迷い出たものを引き返し、傷ついたものを包み、弱ったものを強く」
(エゼキエル34：16) していけるよう助けてくださいます。

□



聖典を通して 夫婦の一致を図る

スペンサー・J・コンディー

結 婚生活において、時折問題が生じたり、不満が出たりというのはだれにでもあることです。では、そうした状態を改善していくための知恵を、私たちはどこに求めたらよいのでしょうか。監督でしょうか。家族でしょうか。それとも専門のカウンセラーでしょうか。人からの助言も確かに役に立ちますが、結婚生活に対する適切な助言は、何よりもまず祈りと聖典を通し主に求めるべきではないでしょうか。

聖典は、しばしば見過ごされてしまっていますが、結婚生活に対する神聖な勧告が織り込まれたすばらしい助けなのです。では、ここでより調和のとれた、満たされた結婚へと導いてくれる聖句をいくつか見てみましょう。

一体となる

「それで人はその父と母を離れて、妻と結び合い、一体となるのである。」(創世2:24) この戒めは、高価なる真珠の中のモーセの書(3:24)とアブラハムの書(5:18)の中にも繰り返し出てきます。では、これはどういう意味でしょうか。

人間の命を生み出す肉体的な面における一致は、夫婦が「一体となる」うえで重要な方法です。しかしそれ以外にも、夫と妻は、ひとつの象徴的な意味において、「一体となる」ことができます。

使徒パウロはこのように言っています。「からだは一つの肢体だけではなく、多くのものからできている。……

目は手にむかって、『おまえはいらない』とは言えず、また頭は足にむかって、『おまえはいらない』とも言えない。……

それは、からだの中に分裂がなく、それぞれの肢体が互

にいたわり合うためなのである。

もし一つの肢体が悩めば、ほかの肢体もみな共に悩み、一つの肢体が尊ばれると、ほかの肢体もみな共に喜ぶ。」(I コリント12:14, 21, 25-26)

これは、パウロが教会員同士の一致の必要性を説いたものですが、夫婦が象徴的な意味においてすべての面で一体となった幸せな結婚生活を営むためには、一致すなわち肉体的な面での一致だけでなく、情緒的、精神的な一致がぜひとも必要になってきます。

愛情

地上での使命も終わりに近づいたころ、救い主は弟子たちに次のような新しい戒めをお与えになりました。「わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互に愛し合いなさい。」(ヨハネ13:34) ほかにたくさんの聖句を通して適切な助言が与えられています。「汝相愛して共にこの世に生きよ。」(教義と聖約42:45), 「あなたはその愛する妻と共に楽しく暮すがよい。」(伝道9:9) 使徒パウロはまた、夫は妻を「キリストが教会を愛してそのためにご自身をささげられたように」(エペソ5:25) 愛しなさいと教えています。主は、予言者ジョセフ・スミスを通して、シオンの夫たる者に対し再び戒めを与えておられます。「汝ら誠心を以て妻を愛してこれと結び合うべし。その他の者に愛着することなかれ。」(教義と聖約42:22)

結婚生活に伴うほとんどの問題は、夫と妻が常に真心から愛し合うよう努めることにより改善されるのです。

気持ちを正直に表わす

夫婦の間で、気持ちを正直に表わすことをためらってし



まうことがよくあります。相手の感情を害することを恐れたり、非難の言葉を口にするこへ不安からそうになってしまうことが多いようです。

しかし、使徒ヨハネはこのように教えています。「愛には恐れがない。完全な愛は恐れをとり除く。」(Ⅰヨハネ4:18) またパウロは私たちに、「愛にあって真理を語」れ(エペソ4:15)と言っています。ベンジャミン王はさらに、私たちは「互いに傷つけ合う心がなく、安らかに暮して、あらゆる人にその当然受けるはずのものを与えたいと思うように」(モーサヤ4:13)ならなければならないと説いています。

すなわち、やさしさと慈悲(完全な愛)に満ちた態度が求められているのです。自分の感情を伴侶に伝える前に、こう自問してみてもはどうでしょう。「この気持ちを伝えることによってふたりの一致は深まるだろうか。この気持ちを伝えなければ、ふたりの間にみぞができてしまうだろうか。」強い気持ちや信念を心の中に秘めておくことによって、ふたりの感情的なずれが大きくなってしまうということもよくあります。

一方、愛をもって正直に感情を伝えられる夫婦は、たとえそれが失望や落胆、怒りの気持ちであっても、食い違いをうまく処理しながら、関係を深めていくことができます。要は、自分の気持ちや感情をどのように伝えるかということなのです。夫婦はお互いに、相手の意見を受け入れながら、オープンに、しかも気遣いを忘れずに、やさしく気持ちを伝えるよう心がけなければなりません。決して怒りを爆発させたり、ひとりよがりになってはならないのです。

友人として相違点の解決を図る

教義と聖約第121章の聖句は、お互いの相違点の解決を図るという点では最高の助言と言えるでしょう。これは直接には、神権の権能の行使について述べられたものですが、結婚関係をより良いものにしていくうえでも非常に役に立ちます。主は私たちに、「説教と堅忍と柔和と温情と偽らざ

る愛とにより(り)……また親切と^{きよ}き知識」(41-42)により努力していかなければならないと教えておられます。

ピリピ人へのパウロの勧告もまた的を射ています。「何事も党派心や虚栄からするのでなく、へりくだった心をもって互に人を自分よりすぐれた者としなさい。」(ピリピ2:3)

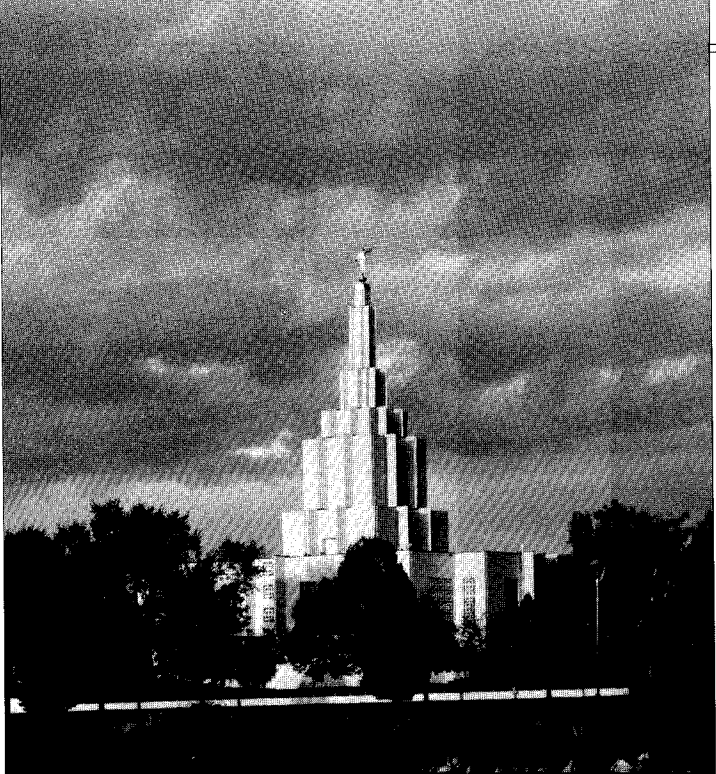
同じ思いとなる

パウロは、「同じ思いとなり、同じ愛の心を持ち、心を合わせ、一つ思いに」(ピリピ2:2)なるようにと勧めています。19世紀の使徒、オルソン・ブラットは、夫と妻が主に近づけば近づくほど、お互いの距離が縮まり、一致が深まると教えています。

「人は、正しい生活をするようになればなるほど、人々を愛し、人々を幸福に導けるようになる。不義な人は、妻に対してわずかな愛情しか注がないが、神の愛に満たされた、正しい生活をしている人は、この神の特質を心の思い、感情、言動のすべてに表わす。そのような人の顔には、愛と喜びと清らかさがあふれ、それらは表情となって現われる。妻はそこに信頼を見だし、愛をもって夫に報いようとするのである。なぜなら愛は愛を生み、幸福は幸福を生むからである。こうしてこの天与の感情は大いに高揚され、ついには永遠の愛という完成され栄光化された状態になるのである。」(「聖見者」ユージン・ワグナー、1960年、p.156)

聖典や現代の予言者たちの言葉から靈感された助言を求めることは、夫婦関係を強めていく最良の方法のひとつと言えます。数ある関係の中でも最も大切なこの夫婦間の関係に主の助けを願うならば、主の祝福があつて、お互いにより深い愛情と理解を示すことができるでしょう。□

*ブリガム・ヤング大学(ユタ州プロボ)社会学教授スペンサー・J・コンディーは、現在休職中で、オーストリアのウィーンで伝道部長として働いている。



神殿に 魅せられて

シャローン・M・ホーキンス

神殿は絶えず私を引きつけてきました。小さいころ、私はスネーク川の河岸に建つ美しいアイダホフォールズ神殿（アイダホ州）を見て、畏敬の念にかられたことがあります。また、クリスマスの季節には、数多くの豆電球に照らし出されたソルトレークシティのテンプルスクウェアがおとぎの国のように思えたこともあります。白い神殿衣に丁寧にアイロンをかけている母の姿を傍らで見ていて、私は母と一緒に神殿に行ける日を心待ちにしたものです。

ところが大人になると私は教会に不活発になってしまいました。私の生活にとって、教会は意味を持たなくなっていたのです。私が再び福音の重要性に気づくようになったのは、それから何年もたってからのことです。私はもう一度道を正すために、やり直す決心をしました。心からの悔い改めとともに、主をもっとよく知りたい、主の神殿に入りたいという強い気持ちがわきあがってきました。

こうしてついに、私は監督から神殿推薦状を受けるにふさわしい者として認められました。長い間待ち望んできた

自分のエンダウメントを受けるその日になって、私は本当に準備ができていいのか心配になってしまいました。神殿で交わす誓約を本当に守っていけるのだろうか、そんな不安にかられたのです。

私は日中のほとんどの時間を、その晩のセッションの準備に費やしました。神殿衣の一枚一枚に丁寧にアイロンをかけ、それからおばに必ず神殿で待っていてくれるように電話を入れました。

「シャローン、失望させるつもりはないんだけど……。」おばは、こう前置きしてから言いました。「私はこれまで何度も神殿に入っているけれど、いまだに全部理解できているわけじゃないの。」

私は決して失望などしないと彼女に伝えました。何年間も孤独でつらい、不活発な日々を送ってきた私が、御父の宮居に参入して、どうして失望などするものでしょうか。ふるさとへ戻ったような気持ちになるに違いありません。私は胸がわくわくして、天使たちが私の神殿参入を知って待っていてくれるような気がしました。

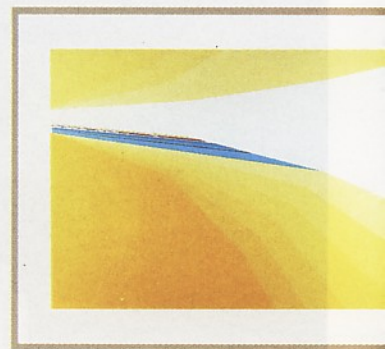
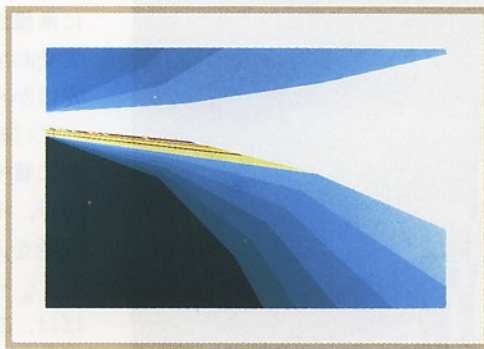
実際そうだったのかもしれませんが。というのも、神殿に入ったその日、私ははっきりそれとわかる温かさと慰めを感じたからです。目の前の大勢の兄弟姉妹や、目に見えない兄弟姉妹の存在を身近に感じて、私の孤独な気持ちはすっかり癒されました。

「こんばんは、姉妹。」ドアを開けて入ってきた私に、白髪の男性が声をかけてくれました。込みあげる涙とともに、それまで抱いていた不安な気持ちは消え去りました。

「やっと来れたわ。ここが私の天父の宮居なのね。」すべてが整然としていて、清潔な明るい感じでした。そこには打ち解けた雰囲気があふれていました。私は、自分の方に向かって歩いて来られる御父を目にすることができるような気持ちになって、熱心に周囲に目を配りながら歩いていきました。心の中には、長い間主の家を離れていた私との再会を、御父はきっと喜んでくださるに違いないという確信がありました。

その日、主にお会いすることはできませんでしたが、私は主がすぐそばにおられるという強い気持ちを感じ、また聖なる場所に立っているという確信を得ました。神殿の正面のドアから出るまで、私は涙を止めることができませんでした。この日、私は自分の過去と未来について、そしてそれらが終わりなく、永遠に続くということを学びました。私は、自分が高貴な存在であること、文字どおり神の娘であることを悟ったのです。

私たちはだれでも皆、心の奥底に主のみもとに帰り、再び共に生活したいという望みを持っているのです。この気持ちは生来私たちに具わっているもので、否定しがたいものです。私たちが神殿に引かれるのは、御父のみたまがそこにあるからにはほかならないのです。□



ソレン・エッツバーグ

人生の行方を決めた福音

副主筆 ジャン・アンダーウッド・ピンボロー

十代で人生の行方が決まる人はそう多くありません。しかし、ソレン・エッツバーグの場合は、16歳ですでに芸術家としての道が整っていました。彼は学校へ行く傍ら、すでに自分の絵を売って年間3,000ドルから4,000ドルもの収入を得ていたのです。彼の絵は、デンマークでも屈指の肖像画家である父親の画法にならったものでした。実際、父親のクナッド・エッツバーグの技法とスタイルがあまりにも忠実に取り入れられているために、父親と息子の作品が見分けられない人もいたほどでした。

ソレンにとって父親はまた、生活という芸術の師でもありました。1961年に教会に改宗したクナッド・エッツバーグは、新しく見いだした信仰の道に息子も入るように勧めました。16歳そこそこのソレンは宗教にあまり関心が持てなかったのですが、宗教がどんなに価値あるものかを父親から聞かされて、ついにバプテスマを受けることになったのです。「私は父が大好きでしたし、尊敬していました。ですから、父に言われたことは何でもしてきました。」彼はこう話しています。

改宗したばかりのソレンには、教会に対する知識も、教義に関する知識もあまりありませんでした。また最初の1カ月間は、教会にも出席しませんでした。しかし次第に福音について学ぶ必要性を感じてきた彼は、モルモン経に関するパンフレットを読み始めたのです。その小さなパンフレットから、彼はモルモン経が確かに神のみ言葉であるという証を得ました。そして、この確信がソレン・エッツバ

ーグの人生の行方を変えることになったのです。

彼は熱心に主に仕えるようになりました。モルモン経に対する確信を得た数週間後には、伝道集会の専任話者として召されています。その後、彼は支部長、伝道部広報ディレクター、高等評議員、若い男性会長などの責任を受けています。

「福音が生活のすべて」

彼の生活を変えることになったもうひとつの出来事は、コペンハーゲン支部（デンマーク）での妻ジョンナとの出会いです。彼女はやはり改宗者で、デンマーク王立音楽院でピアノを学んでいました。ふたりはスイス神殿で結びめられ、その後教会の様々な責任を受けて働いてきました。現在ソレンはスラジェルズ支部（デンマーク）で伝道主任として、またジョンナは若い女性会長として活躍しています。エッツバーグ夫妻には、3歳から17歳まで7人の子供がいます。子供の数が一家族平均ひとりかふたりという国柄を考えると、エッツバーグ夫妻が家族をどれほど大切なものと考えているかが理解できるでしょう。

ソレン・エッツバーグの人生が変わったことで、彼の芸術家としての道も大きく変わりました。「福音を知ったからには、福音が生活のすべてになるのは当然のことです。」40歳のソレンはこう語っています。現在の彼は、芸術面での成功を、目的としてではなく、主に仕え、王国を建設するための一手段として見えています。



アクリル絵の具による連作「人生航路」。ソレン・エッツバーグは選択と進歩というテーマを究めたいと思っている。彼が言うところの「積極性、美、安らぎを表現する色彩」で描かれた作品は、人々が歩む様々な道を示している。その中には「落胆へ導く道」もあれば、永遠の真理の道もある。

永遠の視野に立った考え

芸術を通して人々に仕えたいという願いから、彼は自分の画法をも変えてしまいました。「すべてのことにおいて宣教師になるということが、いかに大事かを考えたのです。」ソレンはこう回想しています。「伝道したければ、今の時代の人々の共感を得る画法で描かなければだめだと感じたん

です。」ヨーロッパでは写実派の画法があまり受け入れられていなかったため、彼は印象派風の画法で描き始めました。のちに抽象画に転向してからは、肯定的な価値感や福音の真理を表現する作品を多く描き続けてきました。

エッツバーグ兄弟の作品は、デンマークの芸術協会の手により、デンマーク王立芸術院の本拠地であるシャルロッ

テンボルク宮殿に展示されています。彼の作品はこれまでもヨーロッパ各地の美術館に展示され、好評を博してきました。しかし彼は、自分の作品の良しあしを、売れゆきではなく、見る人にいかに良い影響を与えるかによって判断しています。

彼のある抽象画の連作の中に、聖典に想を得たものがあります。この作品の裏と下には聖句が書き込まれています。その絵について彼はうれしさを隠せない様子でこう話しています。「私の行きつけの床屋さんが、展示されているその絵を見に行くと教えてくれました。そして、ひとつの作品に添えて書いてあった聖句を一言一言暗唱してくれました。神への信仰は持っていない人でしたが、強く心を打たれたようでした。」

ソレン・エッツバーグは、慎み深さを感じさせ、温かで魅力的な性格の持ち主です。最新作について語る彼の口調からは、熱い気持ちが伝わってきます。彼の最新作は、「人生航路」というテーマで描かれた一連の抽象画です。これは、飛行機の上から地上を見下ろした光景、すなわち、高速道路や通りを方々に行きかう人々にヒントを得て描かれたものです。人々に、自分がどのような人生の道を歩いているかを考えてもらいたいというのが彼のねらいなのです。「私たちは幾度となく目標を立てますが、その目標から遠ざかっていく道にいることに気づかないことがあります。私は彼らに、永遠の視野に立って考えてもらいたいのです。」

スイスのジュネーブに本拠地を置く国際美術批評家協会の会長アレクサンドレ・C・ペレシア氏は、エッツバーグのこの「人生航路」という作品を、非常に抽象的でありながら、

見る人にわかりやすい前向きなメッセージを伝える作品であると評価しています。伝道がソレンの第一の目的であることから考えれば、これはすばらしい賞賛の言葉と取れるでしょう。

宗教が人々の生活の中であまり重要な役割を占めていないデンマークにおいて、伝道の機会を見つけることはなかなかむずかしいことです。「何らかの『宗教』に属している人は、あまり理性的でない人とか、何かにすがらないではいられない弱者とか、打算的な考えを持つ不正直者といった見方をされます。」ソレンはこう語っています。こうした中での伝道は大変な仕事ですが、ソレンは数々のすばらしい経験をしてきています。中でも忘れられないのは、家族の改宗です。

特別な経験

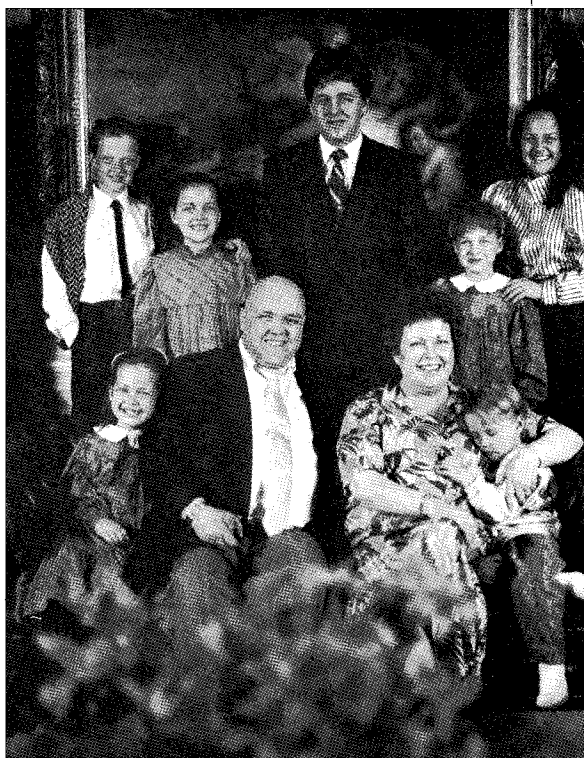
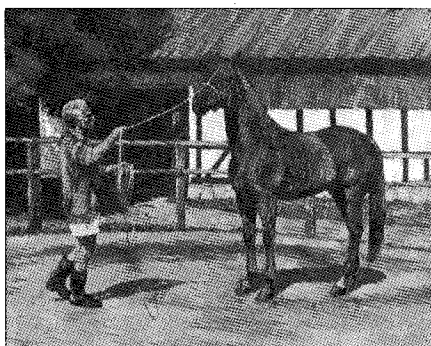
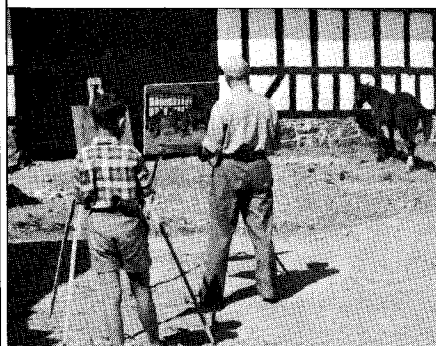
エッツバーグ家では、父親のクナッドとソレン、ソレンの妹のバーギットの3人が教会員となりましたが、母親のカースティン・エッツバーグは、ルター派の信者として頑強に改宗を拒んできました。家族や教会の指導者たちは、彼女を改宗に導くために何年も努力をしてきましたが、クナッドはもはや望みを失いかけていました。「ある朝、父が私の家にやって来て、玄関のところで立ったまま悲しそうに泣くんです。」

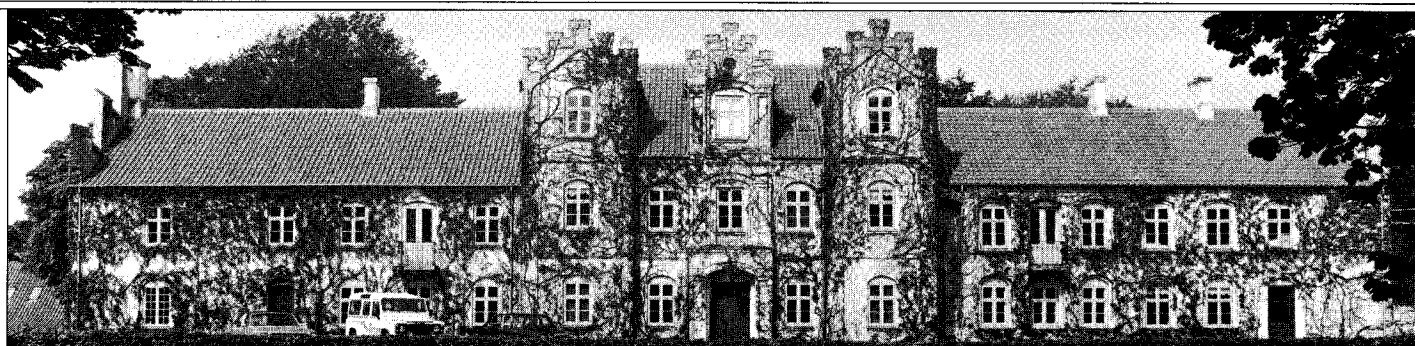
ソレンはみたまに満たされ、父親を抱き寄せるとこう言いました。「お母さんはすぐ会員になりますよ。1年後や2年後じゃなく、今すぐにね。」父親が帰ってから、ソレンは母親に会いに行きました。「10分ほど話してから母がこう言

(左下)夏休みに父と共に絵を描く少年時代のソレン。

(右下)少年時代のソレンの作品。

(右)ソレン夫妻と7人の子供たち。





エッツバーグ家は400年の歴史を持つ城郭。アトリエとギャラリーもここにある。

ったのです。『私もバプテスマを受けたいわ。今すぐにね。』父と母と息子は共に喜びに涙しました。

バプテスマを受けて間もなく、カースティン・エッツバーグは^{がん}に冒されました。病状が悪化するにつれ、ソレンと妹の不安は高まっていきました。母親は祝福師の祝福の中で、人生の使命を全うするまで生き永らえると約束されていたのです。しかし彼女はまだ子供たちとの結び固めも受けていなければ、教会での責任を果たす機会にも恵まれていませんでした。

あと数日の命という医者判断で、鎮痛剤以外のすべての薬の投与が止められてから、夫のエッツバーグ兄弟はソレンに、もう一度祝福を授けてくれるように頼みました。数日間にわたって断食し、祈ったあとで、ソレンは「その病に、神権に従い、母がこの世の使命を果たせるよう母の体から去れと命じてもうよいという気持ちを感じた」のです。カースティン・エッツバーグはその後病から立ち直り、スイス神殿で家族と結び固められました。また初等協会の教師として働くこともできました。それから1年後、彼女は再び病に倒れ、世を去りました。

このような経験を踏まえて、ソレン・エッツバーグは何を優先すべきかをはっきりと見定めるようになりました。彼はこう言っています。「第1は天父のために、第2は家族、第3は教会の召し、そして次に自分の仕事に対して献身的にならなければならないと思っています。」

職業観

ソレンは、芸術家という自分の仕事を特別視してはいません。どんな種類の仕事にしても芸術家と呼ぶにふさわしい人がいるというのが彼の持論です。「どんな仕事でもいいかげんに済ませることはできるし、丁寧にすることもできます。また十分に念を入れた仕事にすることもできます。そして、自分に与えられた天分を用いてできる場合もあるのです。そこまでいくと、芸術作品を作るのと同じだと思います。」こう彼は説明しています。

最高のものを求める努力、これこそエッツバーグ兄弟が

教会の責任を果たすうえで指針としていることです。エッツバーグ家の住居は、コペンハーゲンから80キロほど離れた所にある400年の伝統を持つきれいなお城です。ここは、スラジェルズ支部やコペンハーゲンスターキ部の若者たちの活動の場としてたびたび開放されています。最近では、50人もの若者たちに一晩宿を提供しました。一般社会と同様、悪の影響が強まりつつあるデンマークの学校のことを考え、エッツバーグ兄弟は、教会の若人の活動は、できるだけ興味をそそる楽しいものでなければならないと感じているのです。

子供たちとの親密な関係

エッツバーグ夫妻はまた、自分の子供たちとも親密な関係を築きたいと強く願っています。エッツバーグ兄弟は方方旅行して回りますが、彼のアトリエは家の中にあります。1986年以来、家の一部を画廊として人々に開放し、いろいろな画家の作品を展示しています。今は、ユタ州の画家、特に末日聖徒の画家の作品展覧会を計画中です。

ふたりはいつも、自分の子供たちが福音に忠実な生活ができるよう助けることを最大の課題と考えています。エッツバーグ兄弟はこう話しています。「デンマークで子供を育てていくことがいかにむずかしいことか、皆さんにはなかなかわかってもらえないかもしれません。福音が彼らの行ないの一部になるよう教え、信仰と証を強められるように導いてあげなければなりません。」彼は、子供たちを教え、感化していくうえで、両親が自分自身の生活の中にみたまを受けなければ、この責任は全うできないと強調しています。

ソレン・エッツバーグの芸術家としての将来の目標は、「人生」というテーマを大理石やガラス、クリスタルなどを用いた壁画にして表現することです。彼はまた、子供たちが伝道に出る日を待ち望んでいます。すべての面で、彼は永遠の目標に向かって前進し、その目標に近づけてくれる道を着実に歩んでいるのです。□

奇跡を行なう備え

「私のもとに、家庭と家族を愛している若い女性を送ってください。日々聖典を読み、熟考し、モルモン経に対して燃えるような証を持っている若い女性を送ってください。教会の集会に忠実に出席し、セミナリーを卒業した若い女性、『若い女性確認証』を獲得し、それを誇りをもって身につけている若い女性を送ってください。徳高く、清らかさを身につけた若い女性、神殿結婚でなければ満足しない若い女性を送ってください。そうしてくだされば、私はあなたのもとに、今も永世にもわたって主のために奇跡を行なえる若い女性を送りましょう。」

大管長 エズラ・タフト・ベンソン



奇跡を行なう備え

「私のもとに、みずからを道徳的に清く保ち、教会の出席すべき集会に忠実に出席している若い男性を送ってください。神権の職を全うし、『義務達成賞』を手にした若い男性を送ってください。……セミナリーを卒業し、モルモン経に対して燃えるような証を持っている若い男性、そのような男性を送ってください。そうしてくだされば、私はあなたのもとに、伝道の地で、また生涯を通じて主のために奇跡を行なえる若い男性を送りましょう。」

大管長 エズラ・タフト・ベンソン



あなたは今、 この世で何を していますか

七十人第一定員会会員
ジョン・H・グローバーク

皆さんにお伺いしたいと思います。皆さんの生涯の使命は何でしょうか。神は皆さんにこの現世で何を達成するよう望んでおられるのでしょうか。皆さんは神が望んでおられることを実行しているのでしょうか。

これらの質問に対する答えを得るために、皆さんがみたまを受け、少なくとも次の3つの大切な永遠の真理に心を向けてくださればと思います。

1. 天父なる神は、私たちすべてに現世でなすべき特別な使命を与えてくださっている。
2. この世において、私たちはその使命が何であるかを知ることができる。
3. 主の助けによって、私たちはその使命を果たし、主に喜ばれることをしているという確信を持つことができる。

現在あるがままの自分から始める

これらのことに対する理解や確信は、一度に得られるも

時や環境の変化に期待しているようではいけません。

現在あるがままの自分から始め、
積極的な姿勢で生きていく必要があるのです。

ではありません。神はみ業の進展のために何が最も良いかを考慮しながら、ここにも少し、そこにも少し明らかにされていくのです。十代の若者であろうと、学生であろうと、あるいは宣教師であろうと、結婚したばかりの人であろうと、老若を問わず、人は皆自分が正しい方向に向かっているということを認識すべきですし、実際に認識することができるのです。

しかし多くの方はこう尋ねてくるでしょう。「では自分の使命や召しはどうすればわかるのですか」と。



私たちが第一にしなければならない最も基本的な事柄は、救い主について学び、救い主に従うことです。これを実践すれば、先程の質問に対する答えを得ることができるのです。では次に、皆さんがそのような生活を送れるようになるための特別なステップを5つあげてみたいと思います。

1. 何のやましさも感ずることなく、神殿推薦状を手に行きできるように、みずからをふさわしく整え、常にそのような状態を保つ。

2. 祝福師の祝福を受け、注意深く、祈りの気持ちをもって祝福文をしばしば読み返す。

3. 聖典を、毎日祈りの気持ちをもって読む。

4. 少なくとも朝晩、毎日熱心に祈る。

5. 現在あるがままの自分から始め、何か前向きな事柄に取り組む。(新しい友達をつくる、新しいことを学ぶ、才能を伸ばす、良書を読むなど) 奇跡的な啓示が与えられる日や、自分が変わるときをただばく然と待っていたり、時や環境の変化に期待しているようではいけません。今自分に与えられている責任を引き受け、積極的な姿勢で生きていく必要があるのです。

責任を引き受け、実際に行動する

私たちは時折、責任を引き受け、行動に移らない限り何事も成し得ないという状況に置かれることがあります。今から30年ほど前、私がトンガの伝道部に着任したとき、伝道部長にこう言われました。「君にぴったりの場所があるんだ。ここから数百キロほど離れた小さな島なんだがね。周囲約12キロで、人口は約700人。英語は全然通じないと思うが君にぜひ行ってもらいたいんだよ。レッスンプランを覚え、トンガの言葉を話せるようになるまで戻らずに、そこで頑張ってほしいんだ。」

言われたとおり私はその島へ行きました。そしてそこで、控え目な言い方をすれば、私は様々な問題にぶつかったのです。あるときは、補給物資を積んだ船がハリケーンに遭い、難破して、文字どおり餓死寸前まで追いつめられたこともありました。しかしそれでもなお同僚と私は、頑張り続けたのです。

もちろん失敗もありました。しかし何かひどい間違いを犯しそうになると、必ず主が知らせてくださり、私たちはそのようなことをしないですみました。確信をもって言えることは、いつも正しいことをするよう心がけていれば、間違った方向へ行きそうになるときに、必ず主が知らせてくださるということです。皆さんも、主に耳を傾けることを常としてください。伝道地で、私たちは満足のいくほど十分に力を発揮することはできなかったかもしれませんが、少なくともあきらめることはしませんでした。絶えず前進するように努めました。とにかく、何かをし続けたのです。大事なのはここです。

13カ月後、その小さな島を去るころには、私もすっかりトンガの言葉を覚え、人生についても多くのことを学んでいました。しかし何よりも大切なことは、神が生きておられ、全知全能であり、文字どおり私たちの霊の父であるという確かな知識を得ていたことです。私は、神が私たち一人一人を愛してくださっていることをはっきり知ることができました。

私はイエス・キリストが父なる神の御子であり、私たちの救い主、贖い主であること、また実在のお方であり、私たちのために命を捧げてくださった真の友であることを知ることができました。また、救い主のおかげで私たちが輝かしい復活を待ち望み、最後には罪のない清い状態で天父のみ前に立てるということも知ることができました。

神は確かに私たちに使命を託してくださっていたのです。それがどんなものか詳しく知ることはできませんでしたが、どこから手をつければよいかはわかりました。また、もっと主に近づかなければならないこと、もっと努力しなければならぬこともわかりました。つまり、自分の取るべき道はわかっていたのです。私は主が信頼できるお方であることを理解しました。また主は、私が自分の人生の使命を果たすために、ほかにどんなことができるかも教えてくだ



天父は、私たちすべてに
現世でなすべき特別な使命を
与えてくださっている。



できれば避けたいような
経験に出会うことも
あるでしょう。
不快な思いをすることが
あるかもしれません。
しかしそのような経験こそ、
私たちにとっては
かけがえのないものとな
り得るのです。

さいました。ですから私はこれまで挫折せずにくることが
できました。皆さんもそうできるはずです。

歓迎されざる経験

みずからの使命を果たすために全力を尽くすとは言え、
できれば避けたいような経験に出会うこともあるでしょう。
確かに不快な思いをすることがあるかもしれません。しか
しそのような経験こそ、私たちにとってはかけがえのない
ものとなり得るのです。私が次に伝道した所は、16ほどの
小さな島々からなる地域でした。伝道部の宣教師の数が非
常に不足していたため、私には同僚がいませんでした。私
に与えられたのは、その地に福音を宣べ伝え、教会を設立
するようという指示だけでした。

私はたびたび教会員をこの島々に連れて行っては、伝道
の仕事を手伝ってもらっていました。私たちはいつも小型
の船に乗って島を回っていました。ある日、船に乗って本
拠地の島に向かっていたときでした。天候が急に崩れ始め
ました。気がついたときには、熱帯特有の非常に危険な大
嵐に巻き込まれていました。ふたつの大きな波がこちらに
向かってくるのを見て、船上にいた私たち6人に船長が「海
に飛び込め！」と叫びました。

海に飛び込むと同時に、その小さな船は波の一撃を受け
て破壊され、私たちはまるでくずのように荒波にほんろ
うされました。私たちは前に通り過ぎた島めがけて力の限
り泳ぎ出しました。1時間ほど泳ぎ続けた私たちは、疲労
困ぱいしきっていましたが、どうにか生きて岸にたどり着
くことができました。嵐は比較的早く収まりましたが、私
たちはその後の数日間、この島での生活を余儀なくされま
した。やがて海が穏やかになってから、本拠としていた島
へ戻ることができました。

私はそのときほど、自分の命をありがたく思ったことは

ありません。私たちはとにかく、身近に死が迫るまでは命の
ありがたさがなかなか理解できないものです。こうした経
験を通して、私は人生に対して新たな見方と認識が持てる
ようになりました。

この海に投げ出されたときの経験をはじめ、私はこれま
で自分の選択とはまったく無関係に起こった出来事をいろ
いろ体験してきましたが、現在の幸福や喜びの源はどこに
あるのかと考えると、これらの「歓迎されざる」経験にた
どり着くことが多くあります。このような経験は、あえて
こちらから求めていく必要はありません。それは私たちが
望まなくても向こうからやって来るものです。私たちがし
なければならないのは、全力を尽くして正しい生き方をし、
目標を心に留め、あとはすべて主に任せることです。

何のための船か

私は次のように書かれてあるのを読んだことがあります。
「港に停泊している船は安全だが、船はそのために作られ
たのではない。」これは私たちの生活にも当てはまるように
思います。私たちは様々な困難を経験しますが、身の安全
だけを求めているは、なすべきことを達成できません。
私たちが求めなければならないのは、自分のしていること
は主のみこころに添っているのだという霊的な面での安ら
ぎです。自分が望んでいた身の安全は得られなくとも、必
要なものがすべて与えられるということもあるのです。

教会員でも、信仰とは本来どういうものかを十分に理解
していない人が大勢います。彼らはよくこう言います。「こ
うすべきだというはっきりした確信が得られるまで、つま
り心の内が燃えるまでは、行動しないつもりです。」このよ
うな人々は、日々の生活の中で決定を下すべき事柄がどれ
ほど多くあるかをしっかりと理解せず、すべてのことにつ
いて、「心が内に燃える」経験が必要だと考えています。彼

らはよくこう言います。「混乱してしまっ、どうしたらいいかわからない。」そして結局は何もしないで終わってしまうのです。これでは何の進歩もありません。これは根本的に間違っています。私たちは悪いことはすべきではありませんが、何らかの行動をとらなければならないのです。

これまでの生活の中で、私自身も心の内が燃える経験を数多くしてきました。たとえば、ステーキ部長を召すにあたって、この人こそステーキ部長になる人であるという確信を得たことがありました。また、別の問題に関しても、同じような経験をしたことがありました。しかし、望ましくない事柄を切り捨てていくことによって、最善の方向へ導かれていくということもたびたびありました。何よりもまず、私たちは自分で十分に考えてみる必要があるのです。

実態を十分に把握したうえでひとつの道を歩み始めた場合は、その決定が間違っていたら（悪い決定ということではなく、決定が自分に合っていない場合）、主は必ず「その決定は間違っている。その方向へ行ってはならない。その道は適切でない」と私にはっきり知らせてくださることを知りました。皆さんも同じような導きが受けられるはずです。

ですから今後は、「心の内に燃えるものを感じずるまでは行動しない」という考え方ではなく、「間違っていないと思ったら行動する」というように考えてみてはどうでしょうか。誤った道を避けて別の道へ進んでいけば、自分の行くべき正しい方向へ向かっていることがわかってくるでしょう。そしてこう確信することができるのです。「私は正しい方向に向かってい

「心の内に燃えるものを感じずるまでは行動しない」
という考え方ではなく、「間違っていないと思ったら行動する」
と言うようにしましょう。



「キリストの言葉は、あなたたちのしなくてはならないことをみな教えるからである。」

(二コリファイ第二書三十二章三節)



る。天父の望まれることをしている。天父の望まれないことは何ひとつしていない」と。私たちがこうした成長過程を経、達成していくのを、天父は望んでおられるのです。

結婚と仕事の選択

Ⅱニコファイ32：1－3を引用したいと思います。

「さてごらん、私の愛する兄弟たちよ。あなたたちは道によって入ってから、どのようにしたらよいかと少々心に思^{なによえ}わずらっていると思う。しかしあなたたちは、何故にこれを心に考えこんでいるのか。……それであるから……キリストの言葉をよく味わえ……それはキリストの言葉は、あなたたちのしなくてはならないことをみな教えるからである。」(下線付加)

何と心強い言葉でしょうか。本当にみな教えてくれるのでしょうか。そうです、必要なことはみな教えられます。

これらの手順に従うならば、皆さんは間違いなく人生の使命や召しを達成するために必要なすべての事柄に対し、答えを受け、確信を得ることができるのです。簡単ではないかもしれませんが、確かにこれは可能なのです。こうした確信はまた「だれと結婚するか」「どんな仕事に就くか」といった重要な選択に関しても得られます。

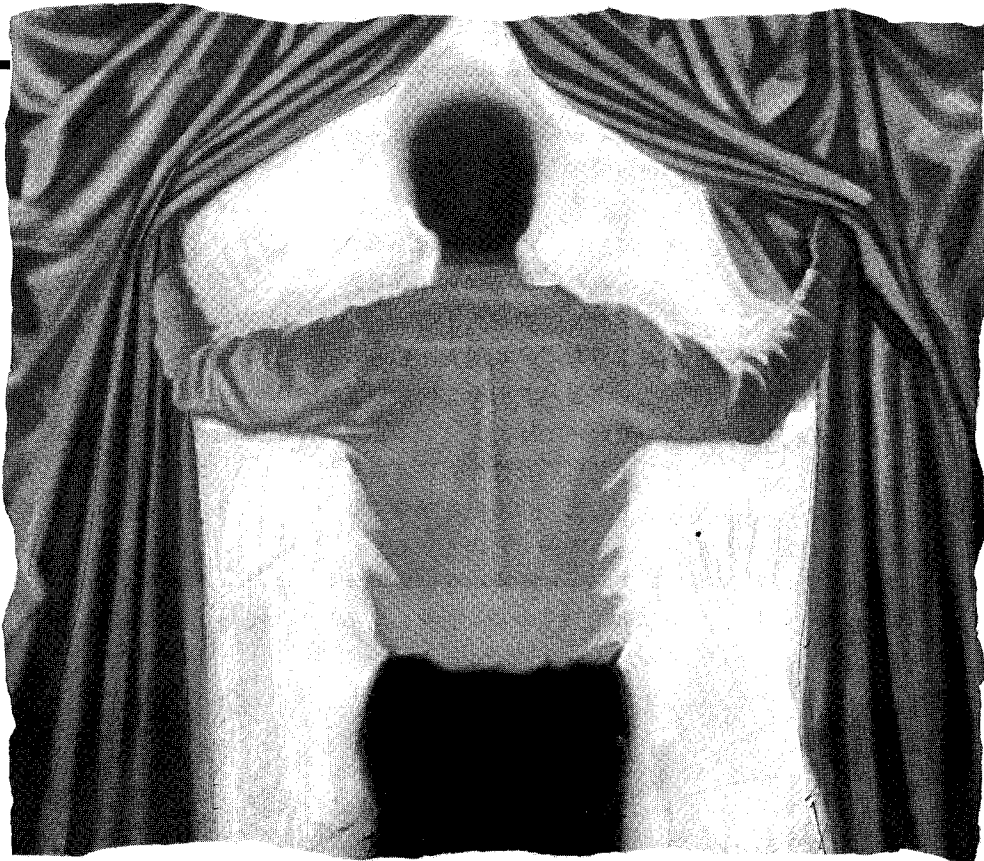
まず前者に関して言えば、男女双方に愛情と永遠と一緒にいたいという気持ちがない限り、それは神のみこころとは言えません。永遠の結婚に関しては、神から一方的に啓示を受けるということはあり得ないのです。そうした気持ちが双方に芽ばえるまでは、幸福な結婚生活は望めないでしょう。一方、正しいと感じたら(そういう気持ちは突然来るものではありませんが)、それに逆らうことはしないことです。無理に思い込もうとしたり、自然な感情を抑えようとしたりせず、自分は間違っていないという確信を持っていただきたいのです。そうすれば、神は今も永世にもわたって皆さんを祝福してくださるでしょう。

後者、すなわち職業についても皆さんは同様の祝福を受けることができます。常識をもって判断すれば、主が皆さんの日々の生活について何を望んでおられるかは十分わかるはずです。主は、私たち一人一人が地上において使命を果たすのに必要なすべての事柄に関心を持っておられるのです。

開かれた神の奥義

私は、お互いの使命が何であるかを悟ったトンガのある夫婦のことを思い出します。何年も前、私がまだ若い宣教師だったころのことです。私は、いつも宣教師やほかの人人に助けを与えているその夫婦に強く心打たれることがありました。彼らの家を訪ねるたびに私たちは、聖典を読んだり、宣教師の食事作りをしたり、近所の子供の世話をし

「さらば見よ、
神の奥義は
開かれ(るべし。)
(教義と聖約6:7)」



たり、扶助協会のレッスンの用意をしたりと忙しく奉仕の業に携わっている彼らの姿を目にしました。ふたりは自分たちの子供にこそ恵まれましたが、いつもほかの人人の子供の世話を引き受けていました。

その後何年かして、伝道部長としてトンガに戻った私は、ルイーサという年老いた未亡人を訪ねるよう依頼を受けました。その住所を聞くと、私は彼女が何年も前に会ったあの女性であることがわかりました。

彼女の家に車を走らせたのは、午後遅くなってからのことでした。私は、何もかも昔と少しも変わっていないことに驚きました。彼女の住んでいる家は、粗末な家でしたがきれいに片づいていました。家の方に向かって歩いていくと、開いたドアのそばに立っている彼女の姿が目にとまりました。私の方に手を差し伸べてきた彼女の目は、すでに見えなくなっていました。そして骨と皮ばかりになってやつれた彼女を抱き寄せた私は、彼女のこの世での生活がそう長くないことを悟りました。

腰を下ろして話している最中に、彼女は私にぜひとも「貧しい人」の力になりたいと言ってきました。そこで私は、彼女自身が助けを必要とする立場にあるのではないかと問い返してみました。すると彼女は、自分は裕福なので心配はいらないと丁寧な答えを返してきました。

少々戸惑ってしまった私は、もっと詳しく尋ねてみました。この夫婦は、ニュージーランド神殿までの飛行機代を幾度もためていながら、そのたびに自分たちよりもお金を必要としている人々に貸し与えていたのです。ほかにもい

ろいろなことがわかってから、私は彼女に言いました。

「ルイーサ、どうして自分のことは心配ないなんて言うんだい。君はご主人にも先立たれて、子供もいないし、目も不自由になっている。健康だって思わしくないようだし、家だって質素なものだ。それに神殿にだって行っていないじゃないか。それでどうして裕福だなんて言えるんだい。」

彼女は私の言葉を遮ると、主が自分の生き方を喜んでくださっていることがわかるから裕福なのだと言明してくれました。そしてこうつけ加えたのです。「もうすぐ主人のところにも行けるわ。主はきっと私たちを祝福し、家族を与えてくださると思うの。何もかもやり遂げられたわけじゃないけれど、私がこれまでしてきたことを主はきっと喜んでくださると思うわ。」

教義と聖約第6章7節を見てみましょう。主はこのように言っておられます。「富を求めずして智慧を求めよ。さらば見よ、神の奥義は開かれ、それより汝ら富める者とせらるべし。見よ、永遠の生命を有つ者は富めるなり。」

ルイーサは、時間をかけて自分の人生の使命と召しを知り、それを達成するために必要なことを何でもしてきました。彼女はここで言われている「智慧」を得たのです。

以上述べてきた事柄がみな真実であることを、皆さんにはっきり理解していただきたいと思います。また皆さんには天父から託された使命があるということも知っていただきたいと思います。皆さんがその使命を見いだし、達成されることを心から願ってやみません。□

(ブリガム・ヤング大学における礼拝説教より)

通りの角を曲がると、ちょうどバス停にバスが止まる
ところでした。私は全速力で歩行者の間を通り抜け、
発車寸前のバスに飛び乗りました。

イギリスのマンチェスターでは、夕方のこの時間のバス
はいつも込み合います。しかしそれも、私には気になりま
せんでした。というのも、王立ノーザン音楽大学のアメリ
カ人学生の私は自由な時間があまりなく、英国人と知り合
う機会もなかったのも、唯一この満員バスの中で新しい友
達ができるのを心待ちにしていたからです。

私はやっとのことで、ひとりの美しい女性の隣に席を見
つけました。彼女はパンフレットのようなものを夢中で読
んでいました。じゃまにならないようそっと腰を下ろした
私は、彼女が読んでいるパンフレットに興味を引かれまし
た。彼女が読んでいたのは、「キリストを信じ、救いを得
よ」と書かれたパンフレットでした。そしてその下には、
「信じさえすれば救われる」と書かれていました。ふと顔

を上げると、その女性は笑みを浮かべながらもけげんそうに
私の方を見ていました。「あ、すみません。つい目がたってし
まって。宗教に関心がおありなんですか。」私が尋ねました。

「いいえ、そうじゃないの。」彼女は強い口調で言いまし
た。「私はもう救われているわ。おもしろそうだったから読
んでみただけなの。」そう言ってから今度は私にこう尋ねた
のです。「あなたはどうか？ 救われているかしら。」

今までこのような質問を受けたことのなかった私は、戸
惑いながらも答えました。「ええ、私……私もそうなるよう
努力しているんです。私、クリスチャンなんです。」

すると彼女は大きな声でこう叫んだのです。「ハレルヤ！
主をほめたたえよ。」バスの中の数人の乗客が振り向いて私
たちの方を見ていました。それから彼女はやや声を低めて
言いました。

「どちらの教会へ行っているの？」

「末日聖徒イエス・キリスト教会です。私、モルモンな

キリストの ことを話す

ジョアン・ハーマー



んです。」

「なんですって！」けわしい目つきになり、私から上体をそらしながら彼女が言いました。

「モルモンのことなら知っているけど、クリスチャンなんかじゃないわ。」

「いいえ、クリスチャンです。」私が答えました。

「いいえ、そうじゃない。」彼女はまたもや言い張るので。「絶対違うわ。以前、イエス・キリストについてのメッセージを携えてきたというモルモンの方がふたり、私の家に来たことがあるのよ。キリストについて語り合おうと思って、家に入れたの。ところが、話はジョセフ・スミスとかいう人のことだけで終わってしまったわ。そんな人、私信じていないし、キリストの話が何も出なかったの。あなたの教会の人たちはクリスチャンなんかじゃないわ。」

そう言って譲らない彼女の前で、私は答えるすべをなくしていました。ところがどうでしょう。自分でも気づかないうちに、私はジョセフ・スミスのことや真の福音の回復にとってなぜ彼がそれほど重要な存在であったかなどをととうと説明していたのです。そして今も続けて啓示が与えられていること、今日も生ける予言者がいることなども証していたのです。

しばらくの間、彼女はじっと私の話に耳を傾けてくれていましたが、席を立ちながら言いました。「ごめんなさい。ここで降りるの。お話できて良かったわ。でも、モルモンはクリスチャンじゃないという私の考えは変わらないわ。」そう言い残して彼女はバスを降りました。その後ろ姿を、私はしばらくじっと目で追っていました。

私は家に着くまで心を取り乱したままでした。その晩は、その若い女性のことと、末日聖徒はキリストを信じていないという彼女の誤った考えが私の頭から離れませんでした。そして、もしまた彼女に会えたとしても、私がキリストに対して証を持っていることやキリストの教会に属していると確信していることを、どう言えば彼女にわかってもらえるのだろうかと考えました。

私は何かしら答えを求め、せめて慰めだけでも得たいという気持ちで聖典を開きました。そしてモルモン経のニーファイ第二書を開け、救い主を証しているあの美しい簡潔な言葉を読み始めました。

「私たちはキリストのことを話し、キリストのことを喜び、キリストのことを説教し、キリストのことを予言し、また私たちの子孫にどこに罪の赦しを求めんかを知らせるために自分たちが予言したことも書くのである。」(II ニーファイ25:26)

英国で学び始めて以来、私はバスの中で多くの人々に教会のことについて話してきました。ユタ州のことやブリガム・ヤング大学のこと、開拓者や予言者のこと、家族のことや才能を伸ばすこと、食糧貯蔵のことなどを話してきま

した。またジョセフ・スミスのことや福音の回復のこと、伝道のことや聖典のことなど実に多くのことを話しかけてきました。しかし、キリストについてはどうだったでしょう。話したことがあったでしょうか。

その晩、私は祈りの中で、この福音と教会が真実であるという証、また罪の赦しの源でもあられるイエス・キリストに、心から感謝の気持ちを述べました。そしてバスの中で出会ったあの若い女性と再び会い、私の持っている証の中でも一番大切なキリストへの信仰について語ることができるようにと祈りました。

そして、まさしくその翌日、私は再び彼女と同じバスに乗り合わせたのです。彼女の方も私に会えて喜んでいました。私たちは天気のことや私の音楽クラスのことなどについて話を交わしました。彼女の降りるバス停が近づいてきたとき、私はやや緊張しながら彼女の方に向き直り、こう言ったのです。「教会のことで、きのう言い忘れたことがあるの。」

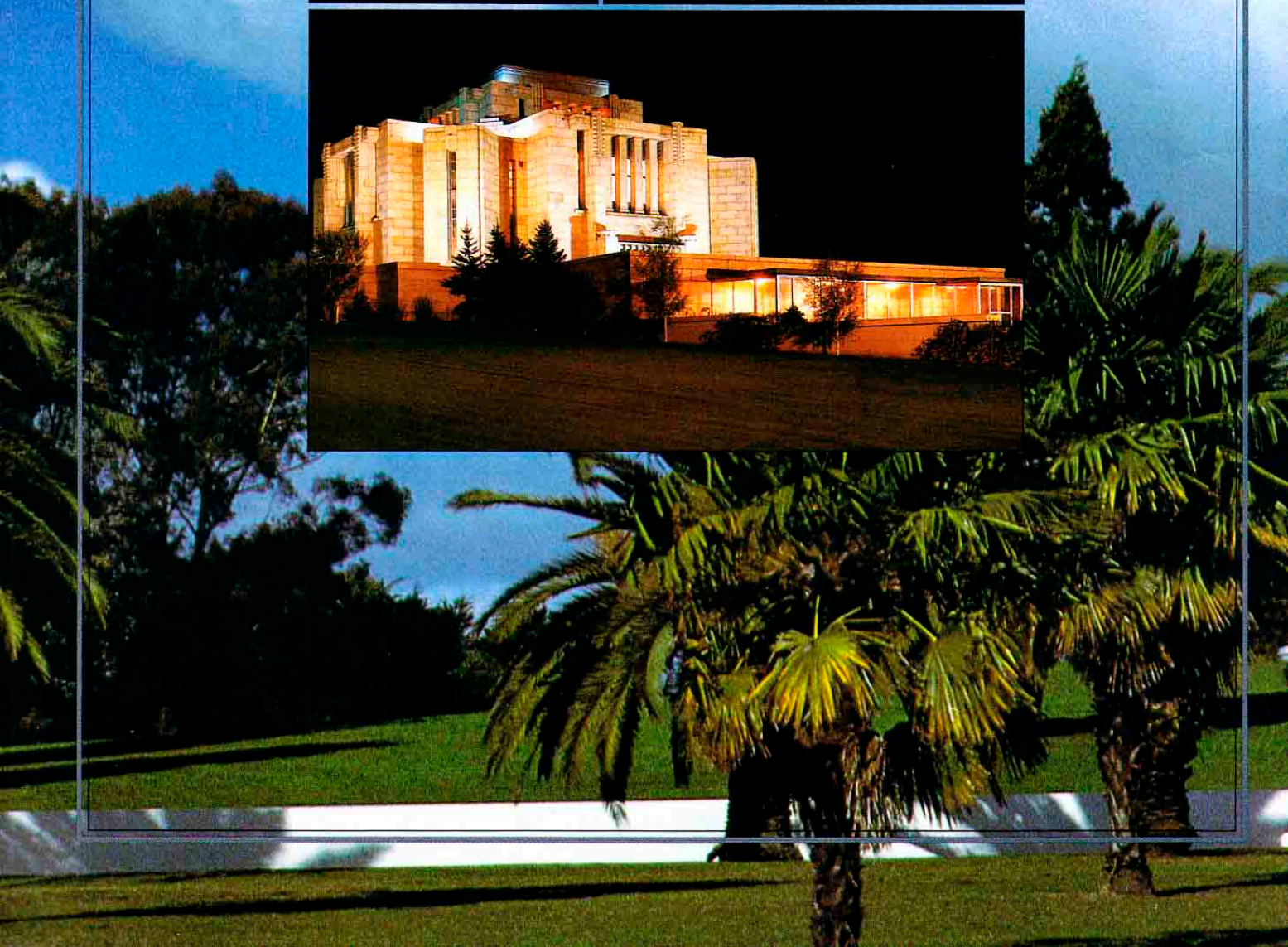
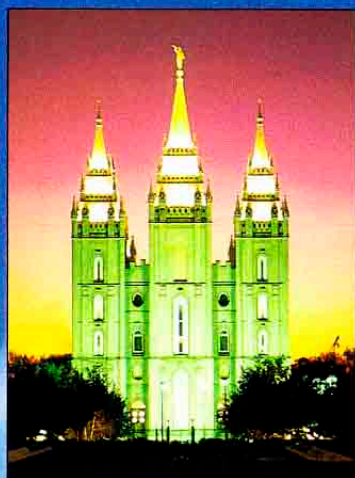
私はキリストのことについて話し出しました。雄弁とか力ある言葉とはほど遠いものでしたが、私はひたすら私たちの救い主、私たちの教会の頭としてのイエスについて証をしました。「私たちの教会は会員たちにたくさんのことを教えてくれるんです。」そうしてこう続けました。「そういったたくさんのすばらしい真理に捕らわれてしまって、イエスが私たちの救い主、教会の中心であるという最も大切な真理を忘れてしまうことがあるの。もっと早くイエスのことについて話すべきだったわ。ごめんなさいね。」

それから私はニーファイ第二書の聖句を引用し、彼女に、モルモン経はキリストを証するもうひとつの書物であることを話しました。

バスが止まり、人々は押し合いながら降りて行きました。その若い女性は、こちらを振り向くこともなく立ち上がると、人込みの中に消えて行きました。降りてしばらくして、窓越しに「ありがとう！」という彼女の声が聞こえてきました。

それ以来、私は彼女に会っていません。彼女がまっしぐらに家に帰り、長老たちに電話を入れ、バプテスマを受けたいと申し出たとは思いますが、バスを降りる前に、少なくとも私がイエス・キリストを信じていること、また末日聖徒イエス・キリスト教会がキリストの教会であり、キリストを礼拝していることを私が確信しているということだけはわかってもらえたと思っています。

日ごろ、兄弟姉妹に何を伝えるべきかを私に思い起こさせてくれたあのニーファイの力強い言葉に、どう感謝したらよいかわかりません。教会の数多いすばらしい祝福について語るとき、私たちの信仰の中心はキリストであるということ、言葉と行ないによって示すべきことを、二度と忘れないようにしたいと思います。□





教会の 3つの使命

アジア地域会長
ヤコブ・ディヤガー

数々の発表がなされた1987年4月の総大会は、歴史上重要な大会としていつまでも私たちの心に残ることでしょう。

この大会で、教会の3つの使命を忠実に遂行するというチャレンジが改めて全世界の教会員に与えられました。この3つの使命はもともと6年前、1981年4月の総大会の席上スเปนサー・W・キンボール大管長から発表されたものです。

「教会の使命」が「全教会員の使命」を意味することを知らない人はだれもいないと思います。私たちに託されている3つの使命とは、(1)福音を友人や周囲の人々に伝え、(2)あらゆる機会を捕らえて会員を強め(完全な者とし)、(3)主の宮居で身代わりの儀式を受け、死者を贖うことです。

私たちはこれまで長い間、神権コーディネーションプログラムを進めてきました。神権コーディネーションプログラムは、教会のすべての活動、組織を神権系統と調整し、また教科課程の全資料と4大標準聖典の相互調整を図る目的で行なわれてきました。

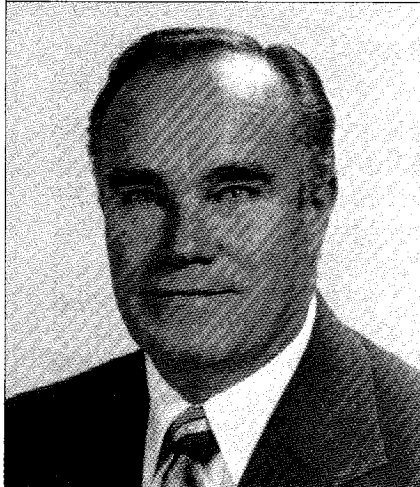
これまで行なわれてきたこの相互調整プログラムは、教会員に3つの使命の遂行を促すという今大会のチャレンジに対する伏線であったと言えます。

私たちは、この3つの使命はどれも、神聖な福音の儀式と誓約を通して果たされることをすでに学んでいます。誓約には、バプテスマや確認の誓約だけでなく、自分自身のためのエンダウメントや家族の結び固めなど、主の宮居で交わされる数々の誓約も含まれます。

これらの誓約の神聖な意味を理解した人は、全力を尽くして自分の生活を整え、主

が望んでおられることを遂行しようとし

ます。
自分自身のための儀式を受け、より高い誓約を交わしているなら、この地上でほかにどのような機会を逃したとしても、問題ではありません。私たちは病氣、悩み、貧困に見舞われたり、多くのことに対して無知である場合もあります。しかし、儀式と



パラモア長老、
七十人第一定員会
会長会に、
ディヤガー長老、
アジア地域会長に
召される

大管長会は、ユタ州北部地域の会長を務めるジェームズ・M・パラモア長老(写真上)を、七十人第一定員会会長会の一員に指名したことを発表した。

パラモア長老は、イギリス諸島・アフリカ地域会長の任命を受けたジャック・H・ゴーズリンド長老の後を継ぐことになる。また、大管長会は七十人第一定員会会員による全世界17地域の会長会の交替についても発表した。

アジア地域会長会の会長に、これまで第

誓約を受け、それに忠実に生活している人は、真に生きていることになるのです。

逆に、これらの神聖なものを生活の錨としていないならば、現世でほかに何を達成したとしても、それは永遠という観点から眺めると何の価値も持たないものとなってしまいます。

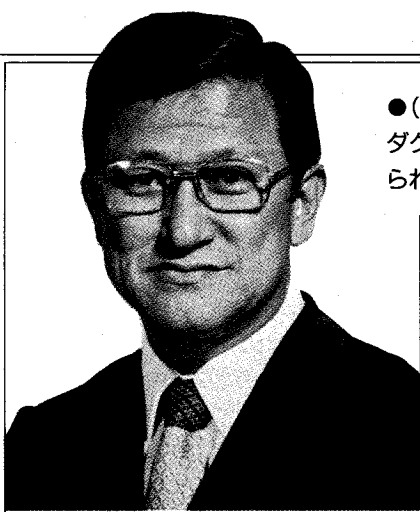
現在アジアでは、日本の東京、韓国のソウル、台湾の台北、フィリピンのマニラに計4つの神殿が建ち、熱心で犠牲の精神を持つ多くの教会員が、主の宮居に参入し、そこで交わされる儀式と誓約を通して祝福を受けられるようになりました。今回の歴史的な意義を持つ大会のテーマは、「キリストに来る様すべての人々を勧誘す」(教義と聖約20:59)というものでした。

皆さんが予言者から与えられた日々の生活と、家庭の中にあって教会の使命を遂行するというチャレンジを完全に理解し、よく従われるように望んでいます。主は私たちに祝福を授けようとして手を差し伸べておられます。これをイエス・キリストのみ名によって証します。アーメン。

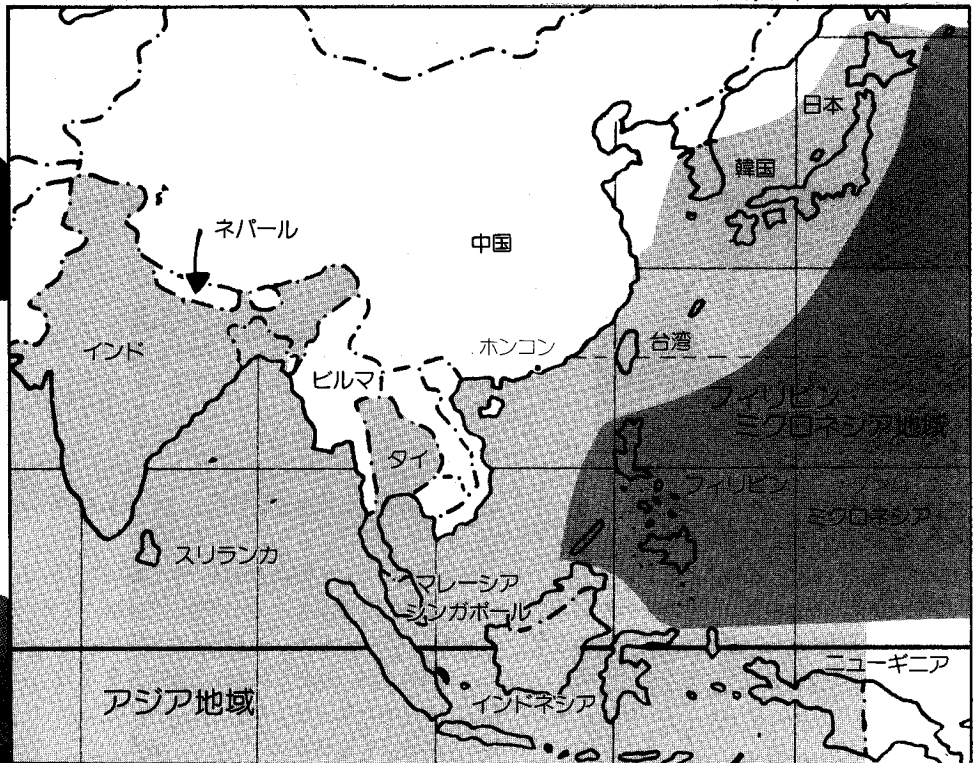
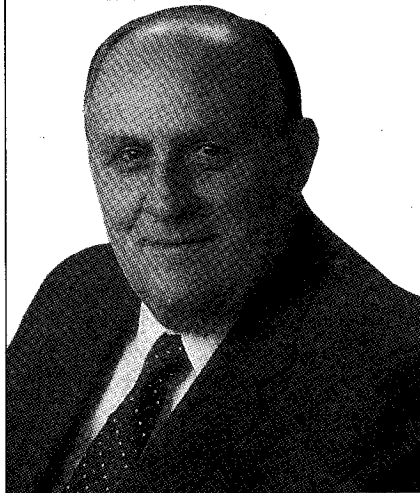
一副会长であったヤコブ・ディヤガー長老、第一副会长にアドニー・Y・小松長老、第二副会长に今年4月の総大会で新たに七十人第一定員会会員に召されたダグラス・H・スミス長老が召された。

以上の変更は1987年8月15日付でなされた。

地域会長会は、各管轄地域における教会の管理運営を担当する。教会員総数は現在620万人を超え、世界98カ国と24の属領地、植民地、居留地にわたって約15,400の



●(写真左上)新たにアジア地域第一副会長に召されたアドニー・Ｙ・小松長老、(左下)第二副会長のダグラス・Ｈ・スミス長老。●アジア地域が分割され、新たにフィリピン・ミクロネシア地域が設けられた。(下記の地図参照)



ワード部、支部が組織されている。教会のこうした成長を考慮して、新たに４つの管理地域が設けられることが発表された。新設された地域は、ブラジル、イギリス諸島・アフリカ、北アメリカ中央、フィリピン・ミクロネシアの４つで、同様に８月１５日付で実施された。

パラモア長老は七十人第一定員会会員として１０年の経歴を持つ。ユタ州北部地域会長を務める傍ら、現在はカリキュラム管理部および衛星放送企画調整担当・実務部長の任にある。

教会幹部としての召しを受けるまでは、十二使徒評議員会幹部書記、ステーク部長、地区代表、ベルギーのブリュッセル伝道部長を務めた。

パラモア長老はブリガム・ヤング大学を卒業しており、妻のヘレン・ヘズリントン・パラモアとの間に６人の子供がいる。

北アメリカ以外の地域で地域会長に召された七十人第一定員会会員の夫人は、それぞれの地域で初等協会、若い女性、扶助協会各組織の、中央管理会地域代表として召される。

た神殿の祝福に関する教義的な説明は会員にとって有益な資料となるであろう。新しい記録用紙やどのような援助が得られるかなどについても紹介されている。また『神殿・系図活動に関する指導者への指示』の箇所には、指導者がこの分野において会員をどう援助したらよいか、その責任についての説明がある。

さらに神権指導者用の資料として「神殿儀式のための人名提出：系図指導者への指示」(PBGS1391JA)が発行される予定である。(近日刊行予定)この資料には、神殿儀式のための人名提出手順に関する最近の変更事項が説明されている。

これらの資料は、簡素化された系図記録作成手順を紹介するために１年にわたって続けられる動きの一環として編まれたものである。ステーク部神殿・系図アドバイザーの責任を受けている高等評議員、大祭司グループリーダーは、各ワード部の系図相談員を管理し訓練を与える。

大管長会は「神殿の儀式と誓約を通してキリストのみもとへ行く」の前書きの中で教会員に「神殿で儀式を受け、誓約を交わすように」励ましを与え、さらに次のよう

系図に関する新資料の発刊

—— 神殿における働きを
強調するステーク部大会 ——

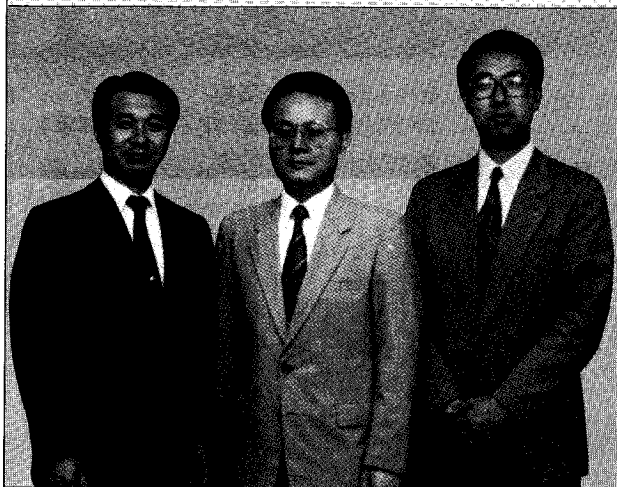
系 図をまとめ、また自分自身と亡き親族のために神殿に参入するよう会員を促すための新資料「神殿の儀式と誓約を通してキリストのみもとへ行く」(PBGS

153AJA)が発行された。(限定配付) 1987年度後期ならびに1988年度前期のステーク部大会では全世界的にこの資料が強調される。個人、家族、先祖のために備えられ

に述べている。「神殿の儀式は、救い主を中心とした生活を築いていくうえで、私たちに大きな助けを与えてくれます。また、永遠の観点に立って物事を理解することによ

って、より大きな心の安らぎを得、人生の目的への理解を深め、戒めに従う気持ちをさらに強いものとすることができます。」

再組織された東京ステーキ部長会 新ステーキ部長に内山雅亘兄弟召さる



〈内山雅亘^{まさのぶ}ステーキ部長〉昭和16年、三重県尾鷲^{おしづ}市生まれ。日本大学法学部卒業。現在日本アイ・ビー・エム（株）勤務。これまで支部長、地方部長、ステーキ部高等評議員、副ステーキ部長などを歴任している。

去る6月7日（日）、アジア地域会長のウィリアム・R・ブラッドフォード長老の管理の下に開催された後期東京ステーキ部大会で、内山雅亘兄弟（前第一副ステーキ部長、写真中央）がステーキ部長に召された。これまでステーキ部長として7年間その責任を果たしてこられた新山靖雄兄弟は、この度仙台伝道部の伝道部長とし

ての召しを受け、ステーキ部長を解任された。

第一副ステーキ部長には増井重之兄弟（前第二副ステーキ部長、写真左）、第二副ステーキ部長には中口達也兄弟（前ひばりヶ丘ワード部監督、写真右）、幹部書記は引き続き藤崎和夫兄弟、そして書記に市川明兄弟が召された。

「主があなたを召されました」

東京ステーキ部長 内山 雅亘

19 87年6月6日（土）、後期東京ステーキ部大会に先立ってアジア地域会長ウィリアム・R・ブラッドフォード長老により、ステーキ部長を召すための面接が行なわれました。

ステーキ部の中にはたくさんのすばらしい指導者がおられますし、私もこれまで20年以上、地方部やステーキ部で働いてきま

したので、これからはホームワード部へ帰り、家族と一緒に集会に出席したいと望んでいました。指導者の面接終了後再びブラッドフォード長老に呼ばれ、「あなたが次のステーキ部長に召されました」と言われたとき、私は耳を疑いました。「私ですか？ 私のような者がですか？」と、通訳者を通して確認していただきましたが、返事はや

はり「あなたが召されました」ということでした。私はもう一度長老にお聞きしました。「もう10年間副ステーキ部長として務めましたのでワード部へ戻していただき、家族と一緒に出席させてください」と。

しかしブラッドフォード長老が「主があなたを召されました」とやさしく手を握って、笑顔で私を見つめられたとき、そこにイエス・キリストの姿と愛を見たように感じました。そしてあふれる涙を抑えつつ、私のような者でも主が召されるのでしたら喜んでお受けいたしますと返事をしていました。

「わが思いは、あなたがたの思いとは異なり、わが道は、あなたがたの道とは異なっている」と主は言われる。

天が地よりも高いように、わが道は、あなたがたの道よりも高く、わが思いは、あなたがたの思いよりも高い。」（イザヤ55：8-9）

主は不思議なことをなさいます。なぜ私のような欠点の多い者を召されたのかまだわかりませんが、すばらしいふたりの副ステーキ部長、幹部書記、書記、高等評議員、監督会、神権指導者、補助組織の指導者や会員の方々の助けを得て、伝統ある東京ステーキ部を守り、その召しにふさわしく主に仕え、主の栄光のために使われたいと決心しました。しかし、人間的な弱さや欠点がたくさんあるため、人を傷つけることもあるかもしれません。しかしイエス・キリストの愛を少しでも多く身につけるよう努力し、神様のみ業のために働きたいと思えます。

●酒びたりの生活から改宗

教会員になる以前は、職場の同僚とふたりで自炊生活をしていましたが、給料のほとんどは酒代になるような生活でした。そのときは一時的に楽しく思いましたが、あとに残るものはむなしさしかありませんでした。

そのようなとき、教会員であった姉夫婦から教会を紹介されました。アメリカ軍人であった義兄は、いつも聖書、モルモン経を携えていて熱心に私に福音を教えてくださいました。また横田基地内にある教会の集会にも連れて行ってくれましたが、私には興味がありませんでした。しかしながら、そんな私が教会に関心を持つようになった理由がひとつありました。それは、義兄が以前はビール、タバコが好きだったのに、な

新役員の聖任(任命)

6月21日から7月20日までに管理本部会
員記録統計課に通知のあった役員の異動
(敬称略)

- 仙台ステーク部上杉ワード部
新監督：菅原誠一郎(前任者：古川盛悦)
- 青森地方部大館支部
新支部長：武蔵野聖徒(前任者：三上敬)
- 盛岡地方部気仙沼支部
新支部長：菊田徳治(前任者：宣教師)
- 岬田ステーク部厚木支部
新支部長：今野和彦(前任者：増田節雄)
- 大阪伝道部御坊支部
新支部長：刈谷真爾(前任者：橋本賢)
- 大阪伝道部田辺支部
新支部長：榎本雅友(前任者：宣教師)



田舎者と違って、周りの生徒は進学のこと
で一生懸命でした。奨励会の月に2回の試
験(対局という)と、週に1回の研修(高
段者の対局の記録を務める)に私は学校を
休んで行きました。出席日数が少なかった
のですが、なんとか卒業でき、さらに将棋
の修業と高校生活を送ることになりました。

明けても暮れても将棋、将棋の毎日でし
たが、学校の授業では一生懸命勉強するよ
うに努めました。なぜなら、将棋の師匠の
大内延介先生(9段)が常々学問をよく修
めるようにと促してくださっていたからで
す。

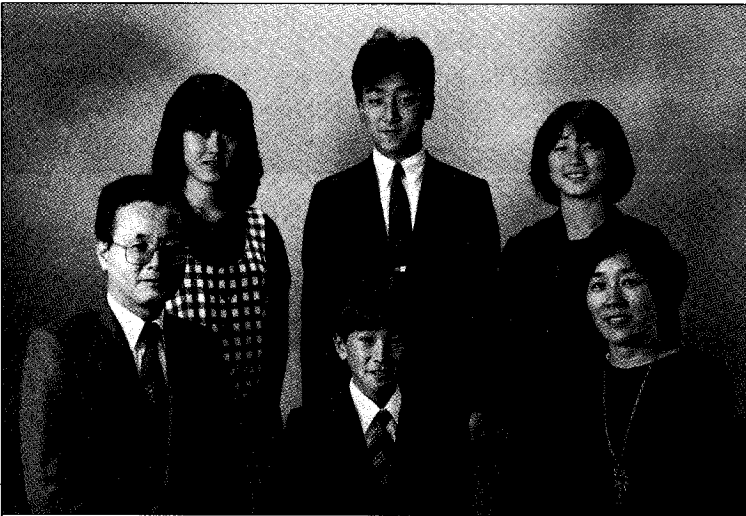
無我夢中で過ごすうちに、あっという間
に時が過ぎ、6級からやがて初段になって
いました。

17歳の夏のことでした。将棋の研究会(練
習対局)のひとりからモルモン教会の宣教
師よりレッスンを受けているので、一緒
に行こうと誘われ、私もレッスンを受けるよ
うになりました。そして、その年の秋にバプ
テスマを受けました。

それまで、教会とかイエス・キリストの
福音についてはほとんど何も知りません
でしたが、レッスンを受け終わって強くみた
まに促され、教会に入りました。それ以来、
将棋中心の生活が教会中心の生活に変わ
りました。

毎週日曜日は教会に行き、週日にはセミ
ナリーやユースの活動がありました。アロ
ン神権を授かり、特に日曜日はその召しを

●内山ご家族。左から内山ステーク部長、
宣恵姉妹(高三)、晃兄弟(小五)、光栄兄
弟(大二)、るり姉妹(中三)、奥様のヒカ
ル姉妹。



ぜ急にそれらを捨てて、生活を変えること
ができたのかということでした。

これほど彼が変わったのだから「これは
何かある」と思いました。私の仕事の性質
上、帰宅時間が不規則でしたが、それに合
わせ遠方から宣教師が訪れて福音を教え
てくださいました。家族の協力もあり、両親
弟と一緒に家庭集会が始まりました。

そして弟と1ヵ月後バプテスマを受ける
ようチャレンジを受けましたが、長い間の
不規則な生活からなかなか抜け出ることが
できませんでした。今思うと大変恥ずかし
いことですが、バプテスマを受ける前日も
夜遅くまで飲み歩き、朝は寮で寝ていま
した。母のドアをノックする音で目が覚め、
「伝道本部で家族と西支部の皆が待ってい
るよ!」と言われてはっとさせられました。
心の中に閃光のようなものが走り、二日酔

いもさめ、それ以来二度と飲むことはあり
ませんでした。

弟と一緒にバプテスマを受け、初めて教
会に行ったとき、無口な私はためらいなが
ら「私は神様を信じます」と証しました。
その一言が26年間の信仰生活の始まりと
なりました。

妻と共に歩んだ21年間の結婚生活は、東
中央地方部主催で行なわれたダンスコンテ
ストで彼女が私のパートナーとして「魅惑
のワルツ」を踊ったことがきっかけでした。
現在4人の子供に恵まれ、教会などの責任
で私が不在がちな家庭で、子供たちを守り、
育て、私に余分な心配をかけないようにと
助けてくれた、すばらしい永遠のパートナ
ーである妻に心から感謝しています。(うち
やま・まさのぶ)

▶職業と信仰シリーズ▶

福音を愛し、 将棋を慈しむ

東京北ステーク部
豊島ワード部

プロ棋士4段 飯田 弘之

●飯田ご夫妻



将 棋のプロ棋士を目指して山形県から
上京したのは13歳のときでした。奨
励会というプロ養成機関に入り、4段にな
ると晴れてプロ棋士になれるのですが、私

は6級で試験に合格し、奨励会に席を置く
ようになりました。

それと同時に学校は都会の中学へ転校す
ることになりました。しかし、私のような



6 月に召されたJMTC 第97期生8人の名簿

S:ステーク部, D:地方部, W:ワード部, B:支部

(写真左より)

〈名 前〉	〈出身地〉	〈伝道地〉
1. 北野 良樹	東京南S/大岡山W	名古屋伝道部
2. 西川 裕子	神戸S/西宮W	名古屋伝道部
3. 中島 美樹	鹿児島D/鹿児島B	神戸伝道部
4. 亀田 邦子	北陸D/小松B	岡山伝道部
5. 斉藤 初代	札幌S/豊平W	東京南伝道部
6. 佐々木礼子	盛岡D/盛岡B	岡山伝道部
7. 水野 ルミ	横浜S/上大岡山W	岡山伝道部
8. 青山 浩	福知山D/彦根B	東京南伝道部

果たすのが大変楽しみでした。また宣教師の方々と一緒に戸別訪問をしたり、道で伝道したりするもの喜びでした。

教会に入ってから間もなく、初段から2段に昇段し、このまま3段、4段と進んで、プロ棋士にもうすぐなれると内心喜んでいました。ところが、2段になって低迷してしまいました。やはり勝負の世界は厳しいもので、周りの人たちのほとんどは、中学を出ると高校には進学せず、将棋一本に打ち込んでいました。

「これではいけない。将棋に対する情熱をもっともっと持たねば。毎日の生活にもっと厳しく挑戦していかなければ」と、みずから戒めました。そのときから教会についても自分の態度をさらに厳しく、何事にも真剣に取り組むように改めました。

高校時代も将棋の修業とは言え、欠席数が多く、ぎりぎりの線ようやく卒業できたようなありさまでした。それでも私はさらに大学へ進みたいと思いました。進学は、プロ棋士を志す私にとっては不安の多い道でしたが、不安だからこそ、その道へ挑戦してみたいと思いました。

大学で同世代の仲間と会えるのは、勝負の世界にいる私にとって楽しみであり、勉強にもなりました。また柔道部にも籍を置いて忙しい毎を送りました。

教会、将棋の修業、大学と日々を送る中でやはり気になるのは将棋の成績でした。2段にはなったものの、次の3段になるにはほど遠く、焦りの気持ちが私の胸に重くのしかかりました。

13歳でプロ棋士になろうと志し、上京してから早7年が過ぎ、20歳を迎えました。普通の世界でしたらこれからが社会人とし

て真価を問われる時期なのでしょうが、将棋のプロの世界では年齢制限があるのです。楽しみや喜びの気持ちが焦りや不安となってきました。

そんなある日、青山におられた佐藤龍猪^{りゅうしゆ}兄弟を訪れてみました。聖典の翻訳に携わるときに受けた神の靈感、信仰によって神のみ力を受けることなどについて教わりました。私も自分自身でこの信仰の偉大な力を使わなければならないと思いました。幸い神殿推薦状を受けていましたので、来る日も来る日も東京神殿に行き、信仰の力について日の栄えの部屋で祈りました。

昇段のチャンスがやって来ました。私は謙虚に、また無心に祈りました。自分の信仰に依りて勝利者となれるように……。しかしそのチャンスを生かすことはできませんでした。

どうして昇段できないのだろう、主の命じたもうことに忠実でないことは何だろう、と真剣に考えました。祝福師の祝福を読んで自分は伝道に出るべきだろうかと考えました。

私は迷った挙げ句、やはり伝道に行くべきだと思いました。早速大学に休学手続きをとりました。将棋の師匠にも相談しました。伝道に行くことは将棋のプロへの道を断念することになるがそれでもよいならとのことでした。私は、自分で決めたことだからそれでよいと思いました。

私は自分の進むべき道を知り、久し振りに平安な気持ちになりました。あらゆる面で忙しい日々を送ってきたからでしょう。私はすべてを神様にゆだね、監督、ステーク部長をお願いして神様の召しを待つことにしました。

しかし、私にはどういう理由かわかりませんが、伝道に出ることになりませんでした。それで必死になって将棋の研究をしました。神様が私にプロになるように命じられていると強く感じたからです。

一度断念した道でしたが、この道しかないと思うと不思議なもので、将棋の成績が良くなってきました。すべてのことに心の平安を得て日々を過ごせました。これなら来年の春までには4段になれると自信を持てるようになりました。

そんなある日の夕方、柔道部で練習中、あばら骨を折ってしまいました。そこが痛んで、長い時間座って行なう将棋の対局ができるかどうか心配でした。医者からは無理だと言われましたが、チャンスを逃したくはなかったので対局に臨むことにしました。

神様の特別な癒^いしのみ手と祝福によってそれらを乗り越え、その年の12月に3段に昇段できました。その後も好調で翌年の3月3日、ついに4段に昇段することができました。その日の対局が終わったのが夕方6時ごろでした。私は帰途につきましたが、なぜか涙があふれて前が見えませんでした。私がつどり着いたのは、広尾にある東京神殿でした。

私が忙しく、進むべき道に迷っているときいつも励ましてくれたのが、飯田姉妹です。4段への昇段を果たしたその翌年(1984年)6月1日に東京神殿で彼女と結婚しました。私たち家族にとって、このイエス・キリストの福音は特別なものです。私は将棋を慈しむとともに、こよなくこの教会を愛しています。(いいた・ひろゆき 1962年生まれ、豊島ワード部第二副監督)

「求めよ、さらば求むる ものを与えらる」

大阪ステーキ部東大阪ワード部
末武 寛子



●右から3人目が末武寛子姉妹。左隣は
寛子姉妹のお姉さんである佐藤葉子姉妹。
右隣は佐藤姉妹のご主人。(バプテスマ会
で)

*

私が初めて教会を訪ねたのは1984年
5月のことでした。電話帳で教会の
所在地を調べ、静まりかえった礼拝堂の中
で姉妹宣教師とお会いし、気がついたとき
にはレッスンの約束をしていました。

それまで神様について考えたことはあつ
ても、何か形のはっきりしないつかみど
ころのないものでしかありませんでしたし、
「信仰」とか「宗教」などという言葉自体
好きではありませんでした。またそのよう
なものに頼って生きている人々さえ軽蔑し
ていました。宗教に頼る人は弱い人間だと
思っていたからです。

私は高校生のときに^{せきずい}脊髄の病気を治療す
るために、あるカトリックの施設に入院し
ました。そこには12歳までの身体障害の子
供たちや孤児、また私のように短期治療の
ため入院している青少年がたくさんいまし
ました。子供たちは施設の中の小学校に通い、
そこで生活をし、家族と過ごせるのは土曜
日の夕方から日曜日の夕方までの24時間
だけでした。それでも家族や帰る家のある
子供は恵まれていました。土曜日になつて
もだれも迎えに来ない孤児を見るのはとて
もつらいものでした。

身体に障害があるため、両親から捨てら
れた子供に楽しい土曜日はありません。そ
んな日々の中で、私は神様に対する希望を
失ってしまいました。

どうしてこんな幼い子供たちが負いきれ
ないほどの重荷を背負わなければならない
のだろう……。そして私自身も先天性の病
と、人生で最も楽しいと思われる十代の中
ごろにかかった難病から絶望を感じないで
はいられない毎日でした。神様なんていな
いんだ、そう思いました。

それ以来、自分を支えるものは自分自身
の精神力だと考えていました。それから8
年、ある教会員の方からジョセフ・スミス
の証についてお話を聞きました。もちろん
まったく信じられないことでした。しかし
後になってそのお話が少しずつ私の心を変

えていきました。あるときから「神様は本
当におられるのだろうか、生きておられる
のだろうか……」と考えるようになったの
です。

そして何日かたって「神様は生きている」
というささやきをほんの少し感じるよう
になりました。そのささやきはだんだんと確
信に変わり、私は教会を探そうと決心しま
した。

私はこれから自分が行く教会を両親に見
てもらいたいと思い、両親と私の3人で教
会を探すことにしました。5月の美しい日
曜日、車で出かけましたが、どうしてもわ
からず、私たちは戻ってきました。しかし、
「きょう見つけなければ」という気持ちが
強く、再び両親と共に探しに出かけました。

「末日聖徒イエス・キリスト教会」。とて
も教会とは思えない小さなビルにこの名前
を見つけたとき、ここが神様のまことの教
会、あの少年ジョセフ・スミスが証をした
主の教会、私が探していた本当の教会……
そう思い心が熱くなりました。「求めよ、さ
らば求むるものを与えらる。たずねよ、さ
らばたずぬるものを見出す。門を叩け、さ
らば開かる。

求むる者はみなその求むるものを与えら
れ、たずぬる者は見出し、門を叩く人は開
かるなり。」(Ⅲニーフай14:7-8)

それからレッスンは順調に進み、今まで
の疑問がどんどん解けていきました。よく
準備された宣教師のレッスンはみたまに満
ちたものでした。私が受けたレッスンの中
で宣教師は一言こう言いました。「神様はあ
なたを心から愛しています。」神様が私を愛
している……。初めて聞くこの言葉が私の
心を貫きました。今までの苦しさや悲しみ
が癒えるのを感じました。

1984年6月10日、私はバプテスマを受け
ました。家族は反対しましたが、私の決心
は揺らぐことはありませんでした。神様の
みたまは私を励まし続けてくださいます。
その日から家族は私の求道者となりました。

家族の中で一番弱く、欠点だらけの不完全
な私ですが、もしそんな私が変わるのなら
必ず家族も理解してくれるという確信があ
りました。教会の行事によく家族と一緒に
参加したり、長老たちと家庭の夕べをもつ
たり、毎日毎日レコードのように証をしま
した。

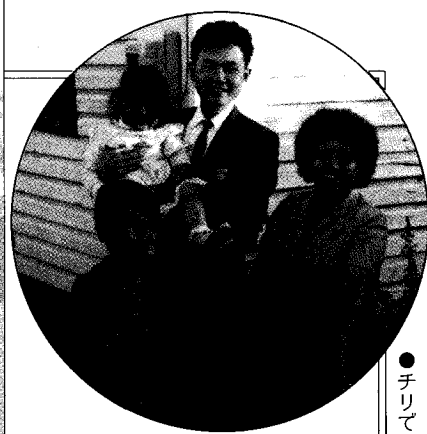
そして3年、今年3月15日に姉がバプテ
スマを受け、私たちは本当の姉妹となるこ
とができました。姉は私の永遠の同僚です。
姉のバプテスマ会には義兄と姉の息子も来
てくれ、本当に祝福でした。家族の理解が
私たちを助けてくれることを心から感謝し
ています。

私はこの地上に生命をいただいたとき、
心臓に4つの病がありました。またそれ以
後多くの障害を負いましたが、それは私が
天父のみもとに帰るための大切な試しであ
ったことを知りました。今私は神様を知つ
ています。主によって生かされていること
を本当に感謝しています。福音が真実で、
モルモン経が確かに主の書物であることを
証いたします。「もし人われに来らば、われ
はかれにその弱点を認めさせん。見よ、わ
れは人を謙遜にするために人に弱点を与
うれど、すべてわが前にへりくだる者には充
分わが恵みを授くるにより、かれらがわが
前にへりくだりわれを信ずる時にはその弱
きを強きに換えん。」(イテル12:27)

主は生きておられ、私たち一人一人を心
から愛してくださっています。またいつも
いろいろなかたちで助けてくださる東大阪
ワード部の兄弟姉妹、宣教師に感謝申しあ
げます。イエス様がキリストであり、救い
主であることを証いたします。(すえたけ・
ひろこ 大阪ステーキ部初等協会書記)

「仕えるなら 愛しなさい」

チリ・コンセプション伝道部専任宣教師 浅間 大介



●チリで伝道する浅間長老。教会員の家族と。

数 多くの宗教があるこの世の中で、唯一まことの福音を知り、また宣教師として永遠の真理を伝えることのできるこの特権に感謝いたします。南米のチリで、たったひとりの日本人宣教師として、ブラジル人、アメリカ人、フランス人、チリ人など様々な国籍の人々にスペイン語で伝道し、数多くの価値ある経験ができるのは非常に大きな祝福です。

チリという国は、紀元前 589 年ごろ、リーハイの一行が約束の地を目指して船出し、たどり着いた所ではないかと言われている。町並はヨーロッパの影響が色濃く見られ、白人系の混血が 70 パーセントを占めています。またレーマン人、ニーファイ人の子孫も所々に住んでいます。国立メキシコ大学に留学していた 1 年半を含め、多種多様な人種の友人ができましたが、チリ人はその中でも最も友好的で利己心のない民族のひとつであると感じています。

彼らは人と分かち合うことを知っている選ばれた民という印象が強く、私の心を何度も平安で満たしてくれました。政情が不安定なため失業率も高く、経済的に苦しい生活を強いられている人々が大勢いるのですが、私たちが家のドアをたたきながらメッセージを伝えようとするとき、初対面でありながら、「アデランテ、アデランテ」（どうぞ、どうぞ）と家に入れてくださり、いきなりオンセ（チリで 4-5 時ごろに取る軽い食事）に招いてくださったりします。彼らの心の広さ、愛の深さに胸を打たれます。彼らは十分な食事ができるほど豊かではありません。それどころか、雨が降って仕事がなければ、その日食べるパンにも困るような人たちです。

道端でとうもろこしの粒を拾い、それを食べてその日暮らしをしている人もいます。伝道を始めて約 2 カ月後のある日のこと、道端で 30 歳から 40 歳くらいのぼろぼろの服を着た女の人が、出店が引けたあと、残っていたとうもろこしの粒を 1 つぶずつ、

悲しそうに拾っているのを見ました。同僚と私は彼女に近づき、お助けしましょうかと言って一緒にとうもろこしの粒を拾いました。拾いながら、彼女と福音のこと、家族のことについて少し話し、1 冊の冊子を渡しました。10 分ほど彼女と話したのですが、この福音は、読み書きできない、このぼろぼろの服を着た彼女にも、等しく大切な「喜びの音信」（教義と聖約 76：40）であると強く感じました。まさしく「人の値は神の前に大いなるもの」（教義と聖約 18：10）なのです。別れるときにはその悲しみの顔も笑顔に変わっていました。その後、彼女がバプテスマを受けたかどうかはわかりませんが、霊界でいつの日か彼女が笑顔でその家族と共にいる場面を見たいと願っています。

先日、「聖徒の道」3 月号の『仕えるなら愛しなさい』という記事の中で、何よりも愛が基となり、その後、その愛により奉仕が生まれなくてはならないというところを読み、はっとさせられました。義務感からの奉仕と、純粋な愛により生まれる奉仕には大きな差があるのです。

私も少しでも多くのバプテスマをしたいと毎日熱心に努めていますが、その目的は、単にバプテスマの数を増やすためではなく、人々を愛するがゆえに、この真実の福音を伝え、彼らにこの世のものではないまことの幸福を得てもらいたいとの思いからでなければならぬと強く感じます。

私は伝道へ出る前に、父から、チリでの伝道の成功のかなめは、いかにチリ人を愛せるかにかかっていると助言されました。今でもその言葉は、昨日言われたことのようにはっきり覚えています。

父が示してくれた神への愛と奉仕の精神からも、学ぶことがたくさんありました。父は私をアメリカの宣教師訓練センターへ送り出すとき、成田まで見送りに来ず、神殿の奉仕があるからと言って、母と神殿に向かいました。本来ならさみしく感じる

ような場面ですが、私は逆に父の神のみ業に献身する姿を通して、父の主と先祖への愛がいかに深いものであるかを改めて感じました。

父からゆずってもらった、もう 20 年以上も使用している聖典の合本には、「宗教は実践である」という言葉が記してあります。私が執事の職にあったときに書いておいた言葉ですが、聖典を開けるたびにいつも私を励ましてくれます。

ゾーンリーダーとしてサンペドロという所に召されたときには、思いを尽くし、体力を尽くして働きました。私がその地に赴任になる以前は、小さな民家で集会が開かれていました。しかし、私が 3 カ月後にそこを去るときには、日曜日は人でいっぱいになり、いすに座りきれない人も出るほどでした。私たちは 15 家族 50 人以上の求道者に恵まれ、30 人以上のバプテスマを目にすることができたのです。転任の通知をもらい、たくさんの求道者を残してほかへ移りましたが、そのあと何十人も当時の求道者がバプテスマを受けたと知らされました。私と同僚が彼らのバプテスマのために熱心に祈り、断食したことは忘れることができません。今は集会所も変わり、活発会員数 100 人以上の大きな支部となりました。短期間に神の助けと恵みにより、すばらしい成長を成し遂げたのです。

私はこれまで 20 カ月間の伝道中、信仰、希望、謙遜、忍耐などたくさんのことを学びましたが、やはりすべての行ないの源は愛になければならないと悟りました。残りの伝道生活において、すべての人を心から兄弟姉妹として愛することができるよう、積極的な思いを持ち、精神と体力を尽くし、主の神聖なみ業に従事したいと思っています。（あさま・だいすけ 1966 年生まれ、横浜ステーキ部横浜第 2 ワード部出身）





米国で改宗して伝道に

—— 宣教師になって初めて
本当の証を得ました ——

岡山伝道部専任宣教師
井岡 寿子

私はこの教会に入ってから2年になります。教会経営の学校であるアイダホ州のリックスカレッジへ行っていたときに改宗しました。その前に1年間、ユタ州のモルモンの家庭でホームステイをしていましたが、そのころは英語もよくわからず、毎週日曜日に教会へ行きながらも、いまひとつ興味を持てずにいました。

リックスに行ったとき、日本人の帰還宣教師の姉妹たちと出会い、日本語で福音を聞く機会がありました。私は小さいころから、神様の存在だけは強く信じていましたので、彼女たちの話を素直に受け入れることができました。モルモン経やジョセフ・スミスの物語なども、何ら違和感を覚えることはありませんでした。「祈ってください」と言われれば忠実に毎朝毎晩祈りました。また、レッスンで断食のことについて学べば、すぐに断食を試してみたりもしました。それでも私は、神様から祈りの確かな答えを受け、強い証を持ってこの教会に入ったわけではありませんでした。アメリカに住んでいたとき、いつでも私の周りにはモルモンの人ばかりで、彼らの模範によってこの教会に導かれたと言ってもよいでしょう。

2年の間、こんな小さな証だけでここまで来れたのは、バプテスマ以来ずっと、モルモンの社会の中で生活することができたからです。もし私が日本で福音を聞いたならば、たぶん改宗することはなかったでしょうし、したとしてもすぐに不活発になったらと思ういます。

一教会員として生活していたときは、小さな証だけでも、何の不快感もなく満足していましたが、宣教師となり立場が変わると、そうはいかなくなってきました。宣教師は、毎日人々に証をして歩きますが、私は自信を持って雄々しく証することができ

ませんでした。ただ単に、あたり前のようにモルモン経などを受け入れ、信じていたからです。

私はJMTCに入ってから、自分の証が小さいことに気づきました。同じ第96期生の長老、姉妹たちは本当にすばらしい宣教師の卵たちでした。彼らの霊的な高さ、知識の豊富さを目のあたりにし、私は劣等感を感じていました。

JMTCに入ったときから、いつも私は、強い証を得られるように神様に祈りました。ところが、いくら祈っても、神様から返事がありません。それどころか何も感じず、みたまを得ることができなくなりました。

JMTC最後の日、証会がありました。ほかの長老たち、姉妹たちはみたまに満たされ、涙を流しています。でも私の心の中は空っぽでした。全員証をするので私も仕方なく立ち上がり証をしました。そのとき証したことはうそではありませんが、心の中はむなしく、みたまに満たされて泣くというよりも、自分が情けなくて泣きたいという気持ちでいっぱいでした。

1カ月間ぐらい、みたまを感じられない日々が続きました。毎日求道者たちに、モロナイ書第10章4節や、救いの計画について説明し、証をしていましたが、胸に何も感じるものがないので、だんだん疑いの心がわき始めました。本当は、神様なんて存在せず、救いの計画もないのではないかと、私の今やっていることは大きな間違いなのではないかと……。でも私は人に証して歩く宣教師なのだから、このままではいけないと思い、神様に助けを求めました。でも答えはありません。私は我慢できなくなり、今週1週間何も得られなかったら、真剣に宣教師をやめることを考えようと思い、神様に祈り、働きました。

そして1週間後、私は大きな証を得るこ

とができました。なぜ1カ月間みたまを感じることができなかったかわかりました。それは、私は人を、神様を愛することができなかったからです。いつも私は、人から愛されることばかり考え、愛することを忘れていました。

第1の律法は、神を愛すること、第2は隣人を愛することです。(マタイ22:36-40参照) 私は一番大切な戒めを破っていました。私は長いこと大きな罪を犯していたことに気づき、涙が止まりませんでした。神様はもう私のことなど赦してはくださらないだろうと思うと悲しくて悲しくて仕方ありませんでした。そのとき、私の心は言葉では言い表わせない温かい平安な気持ちで満たされました。それと同時に、私は何か大きな存在を感じ、確かに救いの計画が存在すること、終わりが近いことなどが頭の中を駆けめぐり、すべてが真実であることを知りました。

私たちが無駄に時を過ごしているうちに、終わりが来ます。必ず来ます。それを確かに感じています。私はまだまだ未熟な宣教師ですが、伝道に出ることができたことに感謝しています。また、伝道に出させてくれた私の両親に感謝しています。(いおかひさこ 1966年生まれ、BYU ハワイ第1ステーク部 BYU ハワイ第3ワード部出身)

編集室から

●心に残った記事の感想文、各地の話題や行事、「日々の恵み」コーナーの証、「職業と信仰シリーズ」、カットなどをお送りください。11月号掲載分の締切りは9月10日(必着)です。投稿には必ず連絡先(電話番号)、教会での責任(役職名)、生年月日を記入してください。お送りいただいた原稿は一部手直しすることがあります。

●あて先：〒106 東京都港区南麻布5-10-30 末日聖徒イエス・キリスト教会「聖徒の道」編集室 ☎03(444)5264

おわび訂正 ▶ 8月号のローカルページで掲載された大阪北ステーク部長会の写真に誤りがありました。おわびして訂正いたします。写真左より柏山歳夫第一副ステーク部長、牧瀬二郎ステーク部長、守谷敏二第二副ステーク部長。





6 月に召されたJMTC 第97期生8人の名簿

S:ステーキ部, D:地方部, W:ワード部, B:支部

(写真左より)

〈名 前〉	〈出身地〉	〈伝道地〉
1. 北 野 良 樹	東京南S／大岡山W	名古屋伝道部
2. 西 川 裕 子	神戸S／西宮W	名古屋伝道部
3. 中 島 美 樹	鹿児島D／鹿児島B	神戸伝道部
4. 亀 田 邦 子	北陸D／小松B	岡山伝道部
5. 斉 藤 初 代	札幌S／豊平W	東京南伝道部
6. 佐々木礼子	盛岡D／盛岡B	岡山伝道部
7. 水 野 ル ミ	横浜S／上大岡W	岡山伝道部
8. 青 山 浩	福知山D／彦根B	東京南伝道部